

---

# 正しい魔法の使い方！

市村鉄之助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正しい魔法の使い方！

### 【Nコード】

N0811L

### 【作者名】

市村鉄之助

### 【あらすじ】

かつて神が世界を滅ぼそうとした「神人戦争」から二千年。故郷を神と龍によって滅ぼされた過去を持つウィザードであるサミュエル・ルードは英雄の娘であるメルル・ウェラーと出会う。

この出会いがきっかけとなり、サミュエルはまだ終わっていないかった本当の戦いに巻き込まれていく。

## PROLOGUE (前書き)

お初にお目にかかります。市村鉄之助と申します。

小説を書くことは初心者ですが、少しでも楽しく読んでいただけたらと思っています。

## PROLOGUE

かつて神々に世界は愛されていた。人間も、動物も、大地も、海も……

しかし、神々の多くは世界を滅ぼそうとした。理由などはわからない。多くの説がある。例えば、争いを繰り返す人間に嫌気が差したなどから始まり、人間に恋した神がその恋心から狂ってしまったからという説もある。

もうはるか昔の話なので確かめることはできないだろう。どんなに優れた魔法使いでも長生きすることができても三〇〇年が限界だろう。

人々は神と戦い、大地に暮らす多くの種族が神と戦った。亜人、エルフ、ダークエルフがその筆頭である。

神の中には彼らに味方する者も少なくはなかった。その筆頭が龍だった。

そして……どこからか現れたのか、『魔族』という種族が現れた。彼らは、当時の人間や亜人、エルフたちが使っていた系統とはまったく別の力を使ったという。

例えば、炎を生み出し、大地を凍てつかせ、森の木々をなぎ倒したという。

例えば、魔法を食らったという。

例えば、自身の何かを代償に神をも超越する力を使ったという。

彼ら魔族は人間と変わらない姿でありながら、人間を超え、龍や神と同等の力を振るつたと伝えられている。

魔族が人間側に着いたことで神々との戦いは有利に進んだ。

そして、戦いの中で生まれた英雄たちが決死の覚悟で戦い続けた結果……神々は敗北した。

この戦いを『神人戦争』と呼ぶ。

どれくらい続いたか解らない戦いであつたが、戦いの後、人間は英雄たちが王となりそれぞれの国を作った。龍は龍族という一つの種族として国を作った。亜人は人間と共に暮らすことを決め、エルフたちは共存する者と静かに森で暮らす者と別れた。

そんな中、魔族がどうするのかどの種族も注目した。

どこからか現れ神と龍に匹敵する力を持つ種族である彼らが今度は敵となるかもしれない、多くの者がそんな不安を覚えたと伝えられている。

だが、拍子抜けするほど魔族は友好的であり、人間との共存を求めたのだつた。さらに多くの者を驚かせたのは、王たちが魔族を重要な役職や貴族へ誘つたが彼は一国民として普通の暮らしで満足だと言つたことだつた。

そして月日は流れ、魔族という種族は人間と交わり、消えた。時折、彼らの力を受け継ぐ子供も生まれたと言われているが、その子供がどのような力を持っていたのかは定かではない。

また、勘違いされると困るので補足させてもらつと、私たち人間を脅かす悪魔と魔族は待った区別の存在である。悪魔にも人間と変わらない種族があるが、それとも違う。

魔族については多くの説があるが、良く解っていないのが現状だつた。

なぜなら彼らは多くを語らなかつたからだ。聞こうとした者が少なかつたからとも言われているが、神との戦いで出会い、その後は復興や国を興したりしたことを考えればタイミングがなかつたと言つてしまえば仕方がない。

それよりも、私には気になることがある。

魔族が加わつたことで敗北した神々のことだ。多くの書物、伝承を読み漁り、言い伝えを聞いても、敗北、敗れた、人間たちが勝つたという言葉で終わっている。

つまり、何が言いたいのかというところ……神は死んだのだろうか？

それとも封印されたのであろうか？ それともただ敗北しただけで、いつかまた戦う時が訪れるのだらうか？

そう考えてしまうとゾツとしてしまう。

現在はかつての世界ではない。

かつての世界がどのようなものであったかは書物などでしか知ることができないが、それでもお互いに手を取り合っていただろう。

だが、現在は違う。国と国が争うようになり、龍と人も互いを警戒しあっている。亜人、エルフたちは相変わらず人間と共に暮らす者もいるが、国によっては迫害される国もある。

もし再び神々と戦うことになった際、彼らが協力することはできるだろうか？

答えは否だ。断言することができてしまうことが悲しい。

そして何よりも、もう『魔族』はいないのだ。もし、いたとしても今の私たちには力を貸してくれるとは思えない。

『神人戦争』が終わってから役二千年がたったと言われているが、二千年もあれば人々は変わってしまう。良くも、悪くも。

不安要素はまだある。それは神をいまだ信仰する者たちの存在だ。

『神人戦争』以前は神々は信仰の対象だったが、現在は信仰するものはいない……と言われているが、神を信仰する国や宗教もある。彼らの先祖は『神人戦争』の折には神側に着いた。無論、人間側に着いた神々を信仰する宗教もちろんある。

結果的に、問題は今も多く残っている。

私だけだろうか？ 神々がまだ世界を滅ぼす可能性を考える者は？ 私だけの杞憂なら良いだろう。何も起こらずに歴史が進み私が考え過ぎであつたなら嬉しい限りだ。

願わくば、今後の未来に多くの希望と優しさを。

ウィザード ウィリアム・ザースアート

パタン、とサミュエル・ルードは分厚い本を閉じた。

数十年前、賢者と称えられたウィリアム・ザスタートの書物が手に入ったと数日前に古書店から連絡が入り、喜んで大金を払ったのは記憶に新しい。

「だけど、大金を払ったかいがあったな」

同じウィザードとしてサミュエルにとって彼は憧れだった。多くの人間を、龍を、亜人を、エルフを助け導こうとした偉大なる賢者ウィリアム・ザスター。いつか、自分もそんなウィザードになりたいと夢見た次期もあった。

ウィザードになることはできた。最年少でウィザードとなったという異例なことまでやってのけた。

だが、自分はウィザードとして傷つけることしかできない。

「後悔はしていない」

目的があって選んだ道だ。後悔など微塵もない。

サミュエルは首を横に振って気持ちを切り替えると、服から懐中時計を取り出す。そろそろ約束の時間だ。

「まったく、何をどうしたら俺がこんな面倒なことに巻き込まれるんでしょうね、師匠？」

わざと大きな声で言ってみるが、返事は返ってこない。

徹夜で酒飲みに勤しんでいた師匠は自室で今頃ぐっすりと寝ていることだろう。

そう思つとイライラしてくる。

「何が悲しくて……英雄様の娘に魔法を教えなきゃならないんだか……」

窓から空を見上げると、悔しいくらいに良い天気だ。逆に自分の心は曇り空、いや台風だ。

はぁ、とサミュエルは盛大に溜息を吐いて見せた。

## PROLOGUE（後書き）

最初なので短いですが、今後は文章を増やしていき、一話一話にボリュームをと心がけたいと思っています。

ご感想、アドバイス、ご指摘などがありましたらよろしくお願いします。

## EPISODE 1 「メルル・ウェラー」

メルル・ウェラーは英雄・テイラード・ウェラーの娘だ。

二〇年前の戦争で、二五歳という若さで敵国最強を名乗るウィザードを倒し、終戦へのきっかけを作った英雄だった。

その後も一〇年前まで戦争が続いていたイスタリオ王国のために尽くし、そして死んだ。

メルルにとって、父であるテイラードの顔は良く覚えていない。

姉は覚えているみたいだが、父が死んだとき自分は四歳だった。

顔は覚えていなくても、父の名は鬱陶しいくらいに付き纏ってきた。二言目には「英雄の娘」と言われ、まるで自分のことを見てもらっていない気分だった。いや、事実見てもらえていなかっただろう。

姉もこんな気持ちだったのかな、と思ったが、姉と自分の出来の良さを思い出して溜息を吐く。

姉は英雄の娘に相応しい才能の持ち主だった。父とは得意な魔法は違うが、風の中位魔法使いであり、努力次第では後十数年で魔法使いの高みである『ウィザード』になれる可能性もあるとまで言われている。

それに比べて自分は……

「魔法使い見習い……か」

呟いて悲しくなってしまう。

さらに腹違いであり、二歳年下の義弟も優秀であり義母と数名の家庭教師によって「英雄の後継者」となるべく育てられている。まさに英才教育だ。

メルルは義母と義弟が嫌いだった。

義母は父に恋した貴族の娘であつたが、どんな手を使つても結婚することができず、メリルの母が亡くなった際に、親身に父に接して後妻に納まつた。

そして、その翌年に義弟を生んだ。というのを、お手伝いさんからメリルは聞いていた。

嫌な女だと思う。多分、母の死などに何も感じてはいなかっただろう。

しかし、そんな女の息子は一二歳という若さで中級魔法使いとなっている。これは異例の早さだった。

なによりも気に入らないのは、義弟が英雄の息子として生きることと何の抵抗も持っていないことだった。周囲に言われるまま、望まれるまま、要望どおりに英雄の息子らしく振舞うようになっていく。

——まるで操り人形だ。

もつとも、本人も英雄になりたいと思っただけにたちが悪いと思える。

「もう、戦争なんてないのに……」

どうやって英雄になるのだろうか？

世界全体規模で戦争がないわけではない。しかし、このイスタリオ王国では一〇年前に腐っていた王を、貴族を当時の王の娘であるファニール王女が全て粛清し女王となり、平和な国へ変わつていった。

それまで敵対していた国と同盟とまではいかないが、友好的な関係を築きイスタリオ王国に平和を与えてくれたのだ。

だからこそ、改めて思う。どうやって英雄になるのだろうか。

平和の中で英雄は生まれない。

メリルはそんな義母と、そんな義弟に負けたくない、父の友人であるサイザリスに魔法を教えてくれないかと頼んだ。

結果としてメルルの願いは断られた。無理もないと思う。彼はイスタリオ王国魔法騎士団団長だ。自分がそう簡単に教えを請うなどわがままだったと思う。

しかし、サイザリスは一人の人物を紹介してくれた。

サミュエル・ルード。

この名前を聞いたとき、メルルは驚きを隠せなかった。

ウィザードという魔法使いの頂点に最年少で到達し、ウィザードの中でも上から数えたほうが早い実力者。師であり、同じウィザードであったシェイナの二つ名「海の魔女」を受け継いだサミュエル・ルード。

自分より、たった三歳しか変わらない少年のことは良く知っていた。というよりも、知らないほうがおかしい。それほどの実力者なのだ。

「……サミュエル・ルード」

声に出してみた……どんな人だろうと心躍らせる。

早く会ってみたいという気持ちがメルルの気持ちを高ぶらせた。

魔法使いと一言で言っても種類は意外と多くある。例えば、魔法戦闘士、その名の通り魔法戦闘を専門とする魔法使いだ。

次に、魔法医療士。治癒などを得意とし、医術に関わる魔法使い。魔法講師、これは魔法を教える先生である。似たようなのに魔法学者があるが、魔法を研究することを仕事とし、知識があれば魔法使いでなくともなれる。

そして、メルルのようにどの道に進むか決めていない基礎を学んでいる者を魔法使い見習いと呼び、その上に、下位魔法使い、中位魔法使い、高位魔法使いが存在する。下位魔法使いで自分がどのような道に進みたいのか決めていくのが定番だ。

高位魔法使いの中でも二つ名を持つレベルになるとその実力は計り知れなくなるという。だが、それ以上の存在がある。

それが『ウィザード』だ。古い言葉で魔法使いを指すその言葉は、高位魔法使いをも超える魔法使いに与えられる。

イスタリオ王国では十数人しかいないと言われている。

メルルがこれから魔法を教わるサミュエル・ルードはその十数人の一人だった。

『魔法事務所』というシンプルすぎてどう反応をしていいのか解らない看板を掲げた建物の前に一人の青年が立っていた。

イスタリオ王国では珍しい、黒髪に黒い瞳を持つ青年だった。

黒髪を軽く伸ばし、やや中性的な印象を与える背の高い青年はニコニコと笑顔を浮かべていた。

「はじめまして、サミュエル・ルードです。サイザリスさんから連絡は受けています。メルル・ウェラーさんですね？」

魔法使い、というよりも町のパン屋などで働いていそうな優しい笑みを浮かべた青年だった。

メルルは一瞬戸惑ったが、本人が名乗ってくれたので目の前のニコニコした青年が最年少ウィザードなのだと自分に言い聞かせ、姿勢を正すと頭を下げる。

「はい、メルル・ウェラーです！ 私のような魔法使い見習いがウィザードであるサミュエル様に教えて頂けるとは本当に光栄です！どうかよろしく願います！」

当たり前といえば当たり前なのだが、ウィザードが魔法使い見習

いに何かを教えるということはありません。

ウィザードの義務として弟子を取り、後継を育てるというものもあるが、それでも中位魔法使いなどから選ばれることが多いと聞く。だからこそ、メリルはハッキリと通る声を迷惑にならない程度の大きな声で、自分なりの感謝を込めて礼をしたのだった。

「そんな畏まらなくて良いですよ。最年少ウィザードと色々噂されていますが、魔法協会へ登録してないだけで意外と僕より年下で優れた魔法使いはいると思います」

そんなはずはないだろう、と思ったが可能性が皆無ではないのでメリルは言葉に困った。

見習いから始まり、ウィザードまであるランクだが、それを決めるのが『魔法協会』という組織だった。古い時代から、魔法使いをまとめ、魔法使いの質を上げることを目的とした組織である。

だが、魔法協会へ所属しなければいけないという規則はない。魔法が使えても魔法協会へ所属せずにギルドに所属し活躍する魔法使いも多いのは確かだった。

とはいえ魔法協会は世界中にあるほとんどの国と契約を結んでいて、魔法使いの数、質を把握しようとしているとのことである。また、戦争が起きた際は中立を貫き通すことでも有名である。

魔法協会に所属するメリットは魔法学校に通えることや、魔法使い同士の交友関係を築くことができること。そして、自分がどのくらいの実力を持つのか分かり、そしてそれに見合うだけのランクと仕事を与えてくれることだろう。

「それで、どうでしょうか？ さっそく魔法の勉強を始めますか？ それとも、今日は自己紹介ですませて後日にしましょうか？」

考えに浸っていたメリルはサミュエルの言葉にはっとして、勢い

良く答えた。

「さっそく始めてください！ よろしく願いします！」

その言葉に満足したのか、笑顔で頷いたサミュエルはこっちに、とメルルを『魔法事務所』の中へと案内した。

事務所の中は整理整頓されていて、香を焚いているのか良い香りが漂っている。三階建ての事務所を通り抜けると、裏手には広く何もない土地があった。

「ここにしましょう。街の外れですし、少しぐらい無茶をしても構わないですよ」

はい、としか返事ができないメルル。

これからどんなことを学ぶのか、まったく想像も出来ないので緊張のしっぱなしだった。

メルル自身、魔法学校に通っている身であるが、どうも魔法学校とは愛称は悪かった。メルルのことを英雄の娘としてみてるクラスメイトや教師にうんざりしていたというのももちろんあるが。

「最初に聞いておきますが……君は僕に魔法を教えて欲しい。それで良いですね？」

「あ、はい！」

「では、君はどのような魔法使いになりたいですか？」

「……え？」

——どのような魔法使いになりたいですか？

そんなことを聞かれたのは初めてだった。

「医療関係だったら、専門外なので知り合いを紹介します。歴史関係は、得意ではないですがまあ教えてあげることもできます。戦闘系であれば私で大丈夫だと思います」

「えっと……私は……」

とりあえず、強くなりたかった。

英雄の娘と呼ばれるのが嫌で、本当の自分を見て欲しくて、だから強くなりたかった。

「答えてください。医療関係を希望する見習いに戦闘を教えても、役に立たないとは言いませんが……まあ時間の無駄かもしれません。せめて、医療関係の基礎を習得してからでも十分に遅くありません」

「私は、私は……」

どう言葉が続ければ良いのかわからない、メリルが必死になって出した言葉……それは。

「英雄の娘になりたくありません」

いや、本心だけど、この場面でこの答えはどうだろう？ 言ってしまうからそう思った。

すごい失敗をした気がするけど、多分間違っていない。

現に、サミュエル・ルードは怒りでプルプルと震えて……ん？

「ははッ、ハハハハハハハハハハ！」

怒りではなく、爆笑するのを我慢していたようだ。

羞恥とちよつとの怒りで顔が真っ赤になるメリルだったが、そんなことはお構いなくサミュエルは笑い続けた。

五分くらいだろうか、爆笑し過ぎて腹の筋肉が限界に達しそうになったサミュエルはようやく笑いも収まり、微妙に苦しげにゼーはーしながらメリルを見た。  
そして。

「おもしろいよ、君は」

そう言っ、ニヤリと笑った。

「……あれ？」

何か雰囲気が違う。

「正直、サイザリスのおっさんから俺のところに連絡が来た時には、英雄の娘がなにを我がままでも言い出したのかくらいにしか思っ、もいなかったんだけど。そうか、英雄の娘になりたくないか、最高だよ、それは君の決め台詞に決定だ！」  
「あれー？」

優しい笑顔の町のパン屋さん風の青年が、爆笑したせいでチンピラに変わってしまった。

「まさか、そっちが地？」

「正解。いや、英雄の娘が来るから取り繕っていたんだよ。下手な態度とって、後で文句言われても嫌だしね。でも、君はそういうつまらないことは言わないし、しない。そうだろ？」

「ええ、まあ」

「だったら始めからこうしておけばよかった。前に君の母親が来た時に、滅茶苦茶に文句言われてさ」

「え？」

母親が来た？

まさか――

「母親って……？」

「だから君の母親だよ。弟だろ、トール・ウェラーを連れていきなりやって来たと思ったら、英雄の息子であるトールの専属の家庭教師になっていただきます、とか言い切つてさ、さすがにびっくりしたな。お願いじゃなくて、これは光栄なことですよ的な言い方だつたぜ」

「そ、それはすみません……それでどうしたんですか？」

「セールスお断り、て思い切り扉を閉めたら外でキレてたよ」

あの人じゃキレるだろうな……。

そんな感想を思いつつ、一つの疑問をメリルはサミュエルにぶつける。

「どうして、トールは断られたのに私は良いんですか？」

「だって、俺はトールと挨拶以外の話すらしてないぜ？ 勝手に母親が言いたいこと言つて、まあ外でキレたから改めて話は聞いてやったけど、結局トールは一言も話さなかったな。それが気に入らなかった。でも君は自分の足でここまで来て、必死で自分の意見をしかも面白いことを言つた。だから気に入ったんだよ。理由なんてそれだけさ」

ケラケラと笑っていたサミュエルはそこまで言つと、ピタリと笑

うのをやめてメリルを見た。

「英雄の娘、そう言われ続けて誰もが個人を見てくれない。しかし、君は見習い魔法使い、周囲は勝手に期待して勝手に落胆する。君はそれが嫌で、英雄の娘ではなく、メリル・ウェラー個人を認めさせたくて……強くなりたいんだろ？」

「……どうして、わかるんですか？」

「気づいてなかったとは思うけど、君がここ来たとき結構切羽詰った顔をしてた。内心ではどんなことを考えてたかはわからないけど、君のような境遇に生まれると、上手く立ち回るか、周囲の期待通りに生きるか、反発するかのどれかしかないだろ？ 諦める、という選択肢もあるけど、そんな奴はここまで来ない。だから、適当に予想しただけだよ」

そこまで言って、サミュエルはまるで妹でも見るようにメリルを見てから、ポンと頭に手を置く。

「とりあえず、強くなってみせな。手伝ってやるから。その代わりにキツイぜ？」

「……望むところです！」

「ハハハッ、やっぱり君はおもしろいや」

こうして、最年少ウィザードと英雄の娘は出会った。

## EPISODE 1 「メルル・ウェラー」(後書き)

サミュエル、メルルの登場です。

説明文が多いですが、ある程度の世界観を含めながら進めていきたいと思っています。

## EPISODE 2 「サミュエル・ルード」

サミュエル・ルードは『ウィザード』である。それも、一年前……一六歳でウィザードとなった最年少記録保持者でもある。

魔法協会に所属する魔法使いでは知らない者はいないサミュエルだが、彼の生い立ちというものは意外と知られていない。もちろん、サミュエル自身が教えていないだけだが。

魔法協会とはあくまでも魔法使いを管理する組織であり、魔法使い個人の生い立ちまで気にすることはない。とはいえ、犯罪を起こした者で未だ捕まっていない者などの生い立ちは調べられることはある。

つまり、サミュエル自身も魔法協会にわざわざ自分の生い立ちを教える必要はないのだ。もつとも、教えると言われて素直に教えるわけもないが。

魔法使いとなる者は多く存在する。

魔力があるからという単純な理由から、家の関係などもある。良い職につけるからという理由もあるだろう。そして、力を求める者だった。

サミュエル・ルードは力を求める者だった。

メルル・ウエラーのように「英雄の娘」という周囲の色眼鏡を外させて自分を認めて欲しいというものとはかけ離れている。彼女も力を求めているが、サミュエルとは根本が違う。

サミュエルが魔法に関わった理由、それは――復讐。

サミュエル・ルードはイスタリオ王国北部に“存在した”小さな町で生まれ育った。

刀の使い手であり、厳しいが優しい母と、そんな母とは対称にいつもニコニコと笑顔を絶やさない自分にとっても甘かった父と三人家

族だった。

他の親族は知らない。両親も話さなかった。

そんな家族が、町が、一晚にして滅ぼされたのだった。

――龍に。

唯一の生存者であった当時一〇歳のサミュエルは、後に師となるシェイナに偶然助けられ、復讐すべく力を求めた。

才能はあったのだろう。そして、同年代の子供が遊んでいる姿を見ても何も思わずに、ひたすら勉強し、修行し、そしてウィザードとなったのだった。

メリル・ウェラーがサミュエル・ルードに魔法を習うこととなり、一週間が経った。

彼女の得意属性は炎、対してサミュエルの得意属性は氷と対照的だが、さすがはウィザードといったところか炎の魔法も高位魔法使い同等に使ってみせるサミュエルに改めてメリルはウィザードという高みを見せ付けられていた。

「お、お疲れさまでした……」

朝から始まり夕方までの数時間を経て、メリルは心身共に疲れ果てていた。

肩口で揃えた金髪も、可愛らしいと評しても良い容姿も、もったいないくらいにボロボロだ。

「はい、おつかれー」

そんなメリルとは反対に疲れなど微塵も見せないサミュエル。メリルは思う、サミュエルも一緒に同じだけの訓練をしていたというに……化け物だ。

とはいえ、サミュエルの教えは非常に上手かった。同時にメリルの覚えも早かった。

まったく、なんでここまで飲み込みが早いのに今まで見習いだっただのか。まったく持って不思議だ。

環境のせいもあるだろう。もしかすると教師が「英雄の娘」に遠慮をしてしまった可能性だってある。まったくバカらしい。

最悪の場合は学校を辞めさせたほうが早いかもしれないと思う。現在は休学という形をとっているが、それがいつまで通用するか。いや、意外と特別待遇を受けてしまいかもしれないな。それはそれで好都合だけど。

「サミュエルさん、私……少しは強くなれましたか？」

息を切らせて問うメリル。

本当のことを言っても良いのか悪いのか、少し判断に迷ったが……  
… 本当のことを伝えることにした。

「とりあえず、下位魔法使いレベルにはなったと思う。あくまでも私見だけど」

天狗になられては困るので、下位魔法使いの中でもまだまだ下の方だと付け加えることを忘れない。

「え！ ほ、本当ですか！」

メリルにとっては高評価だったのか、疲労を忘れてパツと明るい笑顔を見せる。

そんな彼女に苦笑しつつ、サミュエルはこの一週間ずっと考えていたことを口にした。

「とうかさ、俺にしてみるば、どうして今まで見習いだったのか  
が疑問なんだよね。学校では何習ってたの？」

「ええっと、学校では……」

メリルの説明を聞いて、サミュエルは心底それじゃあダメだと思  
った。

魔法学校がダメというわけではなく、魔法学校の授業に対してメ  
リルが合っていないということだった。

当たり前の話だが、基礎は大事だ。これは魔法だけではなく、剣  
術だろうが、勉強だろうが、料理でもあたりまえだ。

魔法学校では基礎を重点的に学んでいた。だが、メリルの場合は  
生まれた環境ゆえに基礎は備わっていた。しかし、せっかく学校に  
入ったものの、また基礎の勉強。これではおもしろくない。

つまり、メリル・ウェラーはそんな性格だった。

サミュエルと出会った日、さっそく訓練に入ったが、基礎がしつ  
かり出来ていることだったので、実戦とまではいかないものの、魔  
法を使って色々教え込もうとしたところ、もの凄く食いつきようだ  
った。

今、説明を聞いて初めて知ったが、ある程度上級生にならないと  
学校では魔法を使うのは禁止されているのとのこと。

学校の方針として問題はない、むしろ当たり前だが、それがメリ  
ルには良くなかった。

もっとも、サミュエルにしてみれば、とっとと飛び級させて上級  
生にさえてしまえば今頃とつくに下位魔法使いレベルになっていた  
だろうと思う。

しかし、これには理由があった。

魔法学校は「英雄の娘」を特別扱いしていた。そのことはまあ良い。だが、それが裏目に出てしまったのだ。

つまり、上級生に飛び級させて怪我でもされたら大変だ。英雄の娘が学園にいる間は入学希望者が増える。

保身と欲だった。

しかしながら、その結果として「英雄の娘」でありながら魔法使い見習いという立場だったメルルを教師や同級生は「英雄の娘のくせに」と思っていたのでバカらしい話だ。

「とりあえず、学校は辞めちまえ」

ということでサミュエルの中でそういう結論となった。

「えーッ！ そんな簡単に言わないでくださいよ！ 授業料だって払ってるんですよ！」

「金払ってんのかよ……そういう時には英雄の娘だから特待生とかじゃないのか？」

「……私はそういう扱いが嫌で強くなりたいんですけど」

サミュエルの言葉に少々起こった感じのメルルだが、そんなことは気にせずサミュエルは言う。

「利用できるものは利用しとけ。金が絡んだら特に！」

「がめつい？」

「違う！ ウチは師匠の金遣いが荒いから、経営が……」

だから金のことにはつい、な……と語るサミュエルには哀愁が漂っていたと、メルルは後に語る。

「そういえば、サミュエルさんの師匠のシェイナ様とはまだ会ったことがないんですけど？ お留守ですか？」

「いや、お留守というか、あの人……俺に二つ名譲ってから、遊んだり、飲んだり、食ったり、寝たり、と好き放題で……」

やっぱり哀愁を漂わせて呟くサミュエル。

「ウィザードがそんななんですか!？」

「いやいや、ウィザードに幻想を抱くな。俺も師匠も含めて、ウィザードってのは変わり者だよ、基本的に」

「変わり者？」

「そう。高位魔法使いは自分の得意属性を極めようと、日夜努力をする。ところが、ウィザードは他にも手をだす。例えば、俺は利用できるものは利用するから、得意属性が氷でも他の魔法もバンバン使う。師匠は天性の才能なのか努力などは必要なく、好き放題にやっている内にウィザードになった変わり者の中の変わり者って話だけど、本当かどうか。『海の魔女』という二つ名は、良く水、氷、闇の魔法を使用したからさ」

属性には色々あり、数種類をまとめて一つの属性と表す場合がある。例えば、光、風、炎を『空』属性。例えば、水、氷、闇を『海』属性などと現すことがある。

もちろん、高位魔法使いが得意属性を極めようとした過程でウィザードまで上り詰める者もいるが、基本的にウィザードというのは魔法使いにとって異質な存在である。

だからこそ、敬われたり、尊敬されたりするのだが、中には変人と嫌うものもいることは確かだ。

「……なんと言いますか、今まで抱いていたウィザードというイメージが」

ガラガラと音を立てて崩れていく、と呆然とメリルは言った。  
そんな姿をみてサミュエルは笑う。

「まあ、中には生真面目過ぎる奴もいるよ、生真面目過ぎるのも変わり者だろうけど。さてと、ウィザードの話は別として、学校の件は……そうだな、家族には俺から話してやる。明日は、俺が君の家に行くから来なくていいぞ」

「ええッ？　ってことは私の家で修行もですか！？」

「当たり前だ……なんだよ、仮にもウェラー家なんだから訓練場所くらいあるだろ？」

「それは、ありますけど……」

なんだかとても来てほしくなさそうなメリルだったが、結局サミュエルを説得する方法もなく、ザミュエル・ルードのウェラー家訪問は決まった。

もつとも、自宅訪問は抵抗あるメリルだったが、学校を辞めることに関しては異論はなかった。

友人もいなく、誰もが英雄の娘として見てくる。勝手に期待して、勝手に失望する。そんな場所にはいたくない、ずっと前からそう思っていたから。

「アハハハハハ、それで結局サミーはお宅訪問することになったんだ？」

夜、エプロン姿で食事の支度をするサミュエルに、明日のウェラ

「家訪問の話聞いたシェイナは大笑いをしていた。

ジーンズにシャツというラフ過ぎる格好に、昼間はずっと寝ていたせいか腰まで伸ばしている金髪はボサボサだ。

パスタをソースで絡めて皿に盛りつけながら、サミュエルは盛大に溜息を吐く。

まったく、この人は身なりを整えて黙っていれば惚れ惚れするほど美人だというのに。

「おお、今日も美味そうだな。いただきます！」

フォーク片手に弟子が自分の席に座る前に食事を始めてしまう。

相変わらずだな、と苦笑する。

そんなシェイナだが、サミュエルにとっては優れた魔法の師であり、手の掛かる姉のような存在であり、そして……命の恩人だった。

「しかし、お前も弟子を持つようになるんだあ。七年でそこまで成長するとは、さすが私の弟子だ！」

「へ？」

なんですか、弟子って？

シェイナの言葉に呆けるサミュエルに、今度はシェイナが呆れたように溜息を吐く。

「お前、気づいてないのか？ 学校を辞めさせるってことは、お前が面倒見るって事だろう？」

「え、ええ。学校が悪いとは言いませんが、メリルとは相性が悪いみたいです。とりあえず、方向性を見つけさせてあげようかと思っっているんですけど」

「それって、弟子取ったってことになるじゃん」

しばらく腕を組んで考えるようにしてから、ポンと手を叩く。

「ですね、弟子とってしまいました。どうしましょうか？」

強くしてやるとは言ったものの、弟子うんぬんまで考えていなかったと、顔を青くするサミュエル。

そんな様子を見てシェイナは呆れたように笑った。

「まあでも、ちょうど良いんじゃないか？ ウィザードの義務の中に弟子の育成があっただろう。遅かれ早かれやらなきゃいけないんだから、早まったくらいと考えておけば。それとも、弟子にするには不満なのんかい、メリル・ウェラーは？」

「まさか、まっすぐで良い子ですよ。だからこそ、俺みたいなのじやなくて、もう少しちゃんとした魔法使いに弟子入りしたほうがいいんじゃないかなとは思ってたんですけど」

「確かに、サミーは歪んでるからな」

「いや、そこは否定して欲しかったんですけどね。っていうか、別に歪んでませんよ」

本気でそう思っているのか、それとも演技かシェイナにはわからなかったが、メリル・ウェラーがサミュエルの弟子になることは良いことだと思っている。

シェイナはサミュエルの師であると同時に、彼が思っているように姉であり、家族であると思っている。

だからこそ、サミュエルの壊れている部分が気が気でない。

今でこそ、こうして笑っているサミュエルだったが、出会ったときは体も心も死に掛けていた。無理も無いと思う。一夜にして、家族を、友人を、町をすべて奪われたのだから。

目に生氣は無く、怪我が完治するまではまともに口さえ開かなかった。

怪我が治って事務所で一緒に暮らすようになったのは、同情もしはあったが、心が死に掛けているサミュエルを放って置けなかったのもある。治療に当たった医者が孤児院を経営しているので引き取ろうかという話もあったが、それを断り引き取ったのだ。

そして、サミュエルはシェイナに言った。

「あなたのことを聞きました。僕に、力をください。みんなを奪ったあいつらに復讐する力を……！」

名前を名乗った時以来だった、まともに言葉を発したのは。

シェイナは迷った。だが、結局生きがいを与えてやるのが良いのではない、弟子にしたのだ。

もつとも、弟子となったサミュエルが最初に覚えたことは料理だった。料理などがまったくできないシェイナの暮らしに、弟子となっても力をつける前に食生活で死ぬと思ったのだらう。

それを見たシェイナは、少しは弟子にしたことでプラスになったのかと思った。だが、すぐに後悔をした。

幼い頃から両親に魔法と剣術を習っていたというサミュエルは才能があった。そして、その才能に見合う以上の強大な魔力を持っていた。だからこそ、無理をさせない程度に教えていこうと思ったのだが、サミュエルは寝る間も惜しんで勝手に訓練をしては倒れるの繰り返しをした。

食事はとっていても、睡眠は取らない。さらには、心身共に酷使するという、一〇歳の少年にとっては異常な行動だった。

無理やり寝かしつけたことも何度もあったが、その度に寝たくないと暴れ抵抗した。理由はわかる。夢を見るからだった。故郷を奪われた時に。

そして、毎回うなされながら謝るのだ。

——僕だけ助かってごめんなさい

その度にシェイナは優しく抱きしめた。姉のように、母のように。そして、少しずつ成長をしていった。

やや根暗な性格だったことに心配したが、友人ができたことでそれも解消されていった。しかし、貪欲に力を求め続けるのは変わらなかった。

文字通り血のにじむ訓練こなす姿は、罰を受ける囚人のように見えたこともあった。

魔法協会に呼び出され、修行という名の過度の虐待をしているのではと取り調べられることも何度かあったのは、今では笑える話だった。

結局、サミュエルはウィザードという魔法協会が定めた魔法使いとしての最高位になるまで、無茶な訓練を辞めなかった。

当時、最年少ウィザードの年齢は二三歳だった。その人物も、サミュエルが生まれる前に他界している。

そんな人物の記録を塗り替えることをするのは正直シェイナ自身、思ってもいなかった。今思えば、何かしら証拠が欲しかっただけなのかもしれない。この六年で自分が少しでも強くなったのだという証拠が。

だが、当時下位魔法使いだったサミュエルがいきなりウィザードになることは不可能に近かった。そこで、高位魔法使いでも遠慮するであろう、魔法協会からの以来を片っ端から受けたのだ。荒事限定で。

例えば、高位魔法使いが弟子数人を引き連れてなんとか退治できるだろう魔物をたった一人で、しかも群れを殲滅した。

例えば、犯罪を起こした魔法使いの集団を一人残らず殺害してみた。

このようなことを何度も繰り返せば、魔法協会もその実力を認めないわけにはいかなかった。

こうして、サミュエルはウィザードとなった。ちなみに、もっと

も戦いたくない魔法使いのランキングに現在三位にいることはどうでも良い話だろう。

ウィザードとなったことで、悪夢を見ることは減ったようだ。だが、現在においても悪夢は見続けている。

きつと、一人だけ助かってしまったことに、未だ負い目を感じているのだろう。

「どうかしましたか、師匠？」

声を掛けられて、シェイナは食事を途中で止めてしまっていることに気づいた。

「なんでもないよ」

軽く苦笑してみせる。

心配の種はまだある。

サミュエルは龍を憎悪している。もちろん、全てを奪われたのだから理解はできる。

しかし、物事はそう単純ではなかった。

正確に言えば、サミュエルは龍に狂っている。もしくは、愛しながら、憎悪している。

だから、シェイナは先ほどサミュエルを歪んでいると言ったのだ。メリルとは面識は無いが、修行風景は見たことがある。強くなることにまつすぐなのは過去のサミュエルと似ているが、根本は違う。彼女はサミュエルと違って、真っ直ぐだった。良い意味でも、悪い意味でも。それはサミュエルにとって無くしてしまったものでもある。

願わくは、サミュエル・ルードがメリル・ウェラーとの出会いによって、色々な意味で成長して欲しいとシェイナは強く思ったのだ。

## EPISODE 2 「サミュエル・ルード」(後書き)

師匠・シェイナ登場。同時に、サミュエルの過去を全てではありませんが、長つたらしくなりましたが書かせていただきました。

ご評価、ご感想、ご意見などがありましたら、どうぞよろしくお願い致します。

### EPISODE 3 「ウェラー家訪問」

ウェラー家を目の前にして、サミュエル・ルードは呆然としていた。

「まさかとは思ってたけど、ここまで大きな家だとは思わなかった…  
…さすがは英雄宅」

ティラード・ウェラーは英雄と称えられたと同時に貴族となった。さらには、後妻に納まっているタニム・ウェラーはもともマヌオク家という貴族の娘だった。

それらの事情を一応は知っているので、メリル・ウェラーも貴族だとわかっていたサミュエルだったが、良い意味で貴族らしくない彼女を見ていてすっかりそのことを忘れてしまっていた。だが、これを見せられると改めて実感させられる。

まさかここまで大きな家に住んでいるとは思わなかった。

「ウチの小さな事務所がさらに小さく感じるよ、こんな家を見せ付けられると」

魔法協会から結構仕事を斡旋してもらっているはずなのに……事務所は小さいし、人手はたりないし、師匠はやりたい放題だし。あれ？ 良いところ無くない？

肩をがっくりと落としていると、ゆっくりと近づく気配を感じて顔を上げる。

「ようこそおいでくださいました。サミュエル・ルード様」

そこには白髪を後ろに流し、白髭を蓄えた、老紳士……いや、老執事がいた。

「はじめまして、本日は突然のこととなってしまったことをお許しください」

「いいえ。当主様もルード様の来訪をとて楽しみにしています。どうぞ、こちらに」

老執事に案内され、手入れの行き届いた広い庭を抜ける。

「建物もすごいな……年季は入っているけど、手入れがしっかりされている」

「こちらに」

感心しながら周囲を見渡すサミュエルを老執事が一つの部屋に案内した。

応接室だろう。扉が開かれると、メリル・ウェラーと二人の女性がいた。

「サミュエルさん、お待ちしていました！ お出迎えできなくてすみません」

そう頭を下げたのはメリル。いつもはラフな格好をしている彼女だが、今日は自宅にいるせいかお嬢様という言葉が似合う服装をしている。白いロングスカートを履き、いつもとは違った新鮮さを与えてくれる。

そして、その格好が良く似合っていた。

「お会いできて光栄です、サミュエル・ルード様。私はメリルの姉

であり、ウェラー家当主である、セイジ・ウェラーと申します」

メルルと同じ金髪を背の辺りまで伸ばした落ち着いた女性だった。眼鏡をしていて知的に見えるが、サミュエルには彼女の持つ魔力の強さがひしひしと伝わっていた。

試しているのだろうか？ 見た目とは反して、好戦的なのかもいしれないと思う。

「はじめまして、次女のアン・ウェラーです」

サミュエルよりも少し年上だろう彼女は、飾り気の無い服装で、髪も短い。

もつとも印象なのが、無表情だった。

一瞬、歓迎されていないのだろうかと思ったが、特に何も感じないので、これが彼女の自然体なんだろうなと思うことにした。

「あの、もう一人、姉がいるんですけど……その」

言い辛そうにするメルル。

「気にしないでくれ、今回は突然の来訪になってしまったし、ご当主と話をさせてもらえればそれでいいからさ」

そんなメルルに苦笑して告げると、セイジとアンの方を向き、丁寧に腰を折る。

「改めまして、サミュエル・ルードと申します。普段はシェイナ魔法事務所の職員として師であるシェイナと魔法協会や国から依頼される仕事をしています。今回は、サイザリウス氏より妹君を預かったために、今後の話と、そしてご挨拶を、突然で申し訳ありません

がさせていただきに参りました」

営業スマイルで二人に微笑み言葉を続けるサミュエル。

事務所でも基本的に依頼人の相手をするのは自分なので、営業スマイルや営業トークは自然と身についている。完全ではないが。

「ご丁寧ありがとうございます。どうぞ、お座りください。今、お茶を持ってこさせますから」

セイジの言葉に礼を言つて、サミュエルは椅子に腰を下ろした。

「つまり、今の魔法学校のカリキュラムではメリルは成長しないということでしょうか？」

「成長しないとは言いません。いずれは、成長するでしょう。しかし、彼女は今、力を求め、成長をしたいと思っている。だからこそ、魔法学校を辞めさせてしまふべきだと思います」

昨晚、シェイナと食事をした後、サミュエルはとある知り合いの元へ足を運び、メールが通う「イスタリオ第一魔法学校」に関して調べた。

その結果、メリルという「英雄の娘」の肩書きを利用して、経営を盛り上げようという動きがあることもわかった。それさえなければ、彼女は飛び級をして今とは違う勉強などもできていたはずだったのだ。

それらを全てサミュエルは三人に話した。

「わかりました……そういうことでしたら、魔法学校を辞めさせることに異論はありません。ですが、魔法学校中退という経歴はあまり良いものではありません。しかも、メリルは魔法使い見習いという立場です。これでは職もなければ、嫁ぐこともできません」

まさか嫁ぐ話が出てくるとは思わなかったものの、サミュエルはなんとか驚きを隠して返事をする。

「職がないのは確かです。なので、正式に私の弟子としてメリルを迎え入りたいのですがどうでしょうか？ 私としても、ウィザードの義務として弟子を育てる義務があります。基本的に弟子を取るのは中位魔法使いから選ぶという方が多いですが、私は才能あるメリルと出会いましたので是非にと思うのですが」

「メリルを……貴方の弟子に？」

セイジは驚きに目を見開いていた。アンも無表情ながらも驚いていることが解る。

そして、もつとも驚いていたのは当人のメリルだった。金魚のように口をパクパクとさせている。

「はい、彼女が望み、ご家族がよろしければ是非」

「そ、それはこちらからお願いしたいくらいの申し出なのですが……貴方ほどの実力者であれば弟子になりたがる人は多いのではないのでしょうか？　なのに、メリルでよろしいのですか？」

セイジのもつともな意見にサミュエルは苦笑した。

当たり前の話だが、ウィザードの弟子になりたがる魔法使いは多い。

魔法使いの高みであるウィザード。そんな魔法使いの弟子となるには、それこそ努力や才能が必要だった。

何よりも、ウィザードはめったに弟子を取らない。変わり者が多いからとかいう理由ではなく、弟子がついてこれないのだ。同時に、自分の技術を伝えたくない者もいる。

だからこそ、魔法協会は義務として後継の育成を課しているのだ。

「先ほども言いましたが、メルルは才能もあり、やる気もあります。私個人も彼女のことは気に入っていますし、そちらが問題なければ、それに、学校を辞めるように進言しているわけですし、そちらの責任も取ると考えてもらって構いませんよ」

セイジにとってこの申し出は信じられなかった。

サミュエル・ルードと言えば、最年少でしかも変則的な方法でウィザードとなった特殊なタイプだ。そんな彼に弟子入りをしたい魔法使いは多い。貴族の中でも彼を専属の家庭教師にしたいという者もいるくらいである。

義弟もその一人であり、義母と共に頼みに行ったが断られたと聞いている。

そんな彼がメルルを弟子にと本人が申し出てくれているのだった。このようなチャンスを断るほどセイジ・ウェラーは馬鹿ではない。

「メルルはどうなの？」

「弟子にしてもらえるなら、して欲しいです！」

「それでは、ルード様、妹のことをどうかよろしく願います」

椅子から立ち上がると、セイジはサミュエルに向かい深く頭を下げた。

こうして、メルル・ウェラーがサミュエル・ルードの弟子となることは正式に決まった。

とはいえ、問題もないわけではなかった。

それは――授業料である。

これは高位魔法使いに多いのだが、弟子に物事を教えることに金銭を要求するのだ。もっとも、魔法を弟子に教えるだけで生活ができるわけではないので、仕方がないといえば仕方がない。

だが、考えて欲しい。

イスタリオ王国で十数人しかいない、ウィザードの教えを請うのだ。いったい、いくら掛かるか……

「ああ、別にいいですね。授業料は」

これがサミュエルの答えだった。

これには三人もあつけに取られてしまう。

「ちょ、つちよと、サミュエルさん！ 高位魔法使いが弟子に授業料払わせているのに、ウィザードが無料って、どんだけボランティア精神に溢れてるんですか！」

イスタリオ王国では、一ヶ月普通に生活するのに一〇万ウォルあれば問題ない。

そんな中、高位魔法使いはそれぞれ違うが、中には月に五〇ウォル要求する者もいると聞く。

しかし、ウィザードであるサミュエルは金はいらないと言ったのだ。

ウェラー家にとってはありがたい話なのかもしれないが、かなりありえない話だった。

「まだ私自身も修行中の身ですし、もし授業料を払わないことに抵抗があるなら事務所を手伝ってもらうことでどうでしょうか？ 人手不足ですが、依頼はくるので修行にもなりますから」

給料も少ないながら出しますよと言うサミュエルに、給料はいりませんからコキ使ってくださいと、メールとセイジは頭を下げた。そんなこんなで、メリル・ウェラーはシェイナ魔法事務所の臨時職員となったのだった。

人手不足に困っていたサミュエルは、給料を払わずに職員を一人確保できたことで内心満面の笑みだった。

自分の価値をいまいち理解していないウィザード、サミュエル・ウェラーだった。

### EPISODE 3 「ウェラー家訪問」(後書き)

ウェラー家姉妹登場です。一人、出ていませんが。

次回は、もう一人の姉と義弟、義母の登場で波乱の予感です。

ご感想、ご評価、ご意見などをしていただけると、非常に嬉しく思います。どうぞよろしくお願いします。

## EPISODE 4 「ウェラー家での訓練」

今後のメルルの方針などを、三人で話したサミュエルは老執事が持ってきてくれた紅茶を至福の表情で飲んでいた。

とりあえず、メルルはシェイナ魔法事務所職員見習いとして、サミュエルと共に働きながら弟子として修行もするという事となった。簡単な話、修行の一環としてシェイナ魔法事務所で働くということだ。

学校の退学はセイジが問題なくやってくれるそうだ。同時に、今までウェラー家の名前を使って儲けていたことを指摘し、授業料をすべて取り返してやるとエガオで言っていたので、そのとおりになるだろう。うん。証拠の資料も渡しちゃったし。

「あの、失礼ですけど、ルード様は紅茶が好きなのですか？ とても美味しそうに飲んでいたので」

つまり、気になるほど至福の表情でサミュエルは紅茶を飲んでいったようだ。

「え、いや、その、お恥ずかしい。私は紅茶だけではなく、珈琲や煙草など嗜好品が好きでして。とはいえ、ここまで良い葉を使った紅茶なんて飲んだことがなかったもので……すみません」

少々顔を赤くして、照れながらも説明するサミュエル。  
すると、セイジは不思議そうに首をかしげる。

「いえ、謝ることではありませんが……こちらこそ変なことを聞いてすみません。ですが、ウィザードの貴方が依頼を受ければ、相当

な額の報酬がもらえらると思つたのですが？」

「言いたいことはわかります」

サミュエルは苦笑する。

確かに良い葉を使った紅茶だが、別に貴族だから買えるというものででもない。手を出そうと思えば、貴族ではない一般人でも少し余裕のある家であれば帰る程度の葉だった。

もっとも、その葉の最大限の良さを引き出せるウェラー家の用人はさすがの一言だが。

セイジが何が言いたいのかというと、ウィザードの受ける依頼というのは中位魔法使いが数人で、高位魔法使いが請ける仕事から、ウィザードでなければ解決できないレベルの依頼まである。それほど依頼を一度でもこなせば大金が入ってくるのは間違いないからだ。

それがなぜ、安くないとはいえ紅茶一つで幸せそうなのか気になったということだろう。

「魔法事務所では基本的に、仕事を依頼されれば動きます。とはいえ、ウィザードが二人もいる所に依頼に来る人は少ないです。とんでもない依頼料を取られると思つてゐるみたいですが、これでもウチの事務所は王国でもかなり安い方の部類なんですよ。後は、私が訓練を兼ねて個人的に受けるものがありますが、その報酬は事務所維持に回し、残りは孤児院に全て寄付していますので」

あまり自分には金が入ってこないのだと笑う。

「孤児院ですか？」

興味があつたのか、メリルが尋ねてくる。

「ああ、俺が世話になっている魔法医療士ジュリア・カドリーが経営している孤児院だよ」

「カドリー孤児院ですか？」

「ん？ 知ってるの？」

「はい、名前だけですけど」

なるほど、とサミュエルは頷く。

ジュリア・カドリーは王国でも、いや王国外でも有名な魔法医療士である。

どのくらいの魔法使いなのはサミュエルも知らない。だが、その技量の高さ、多くの子供たちの母として、医療魔法士の憧れの的である。噂では死者をも行き返すとまであるが、さすがにそれは不可能だろう。

「彼女には子供の頃に世話になってね。その時からずっと世話になりっぱなしなんだ。別に経営難ではないけれど、基本的にあまり患者から金を取ろうとしない人だから」

そう言って笑うサミュエルはとても優しくそうな顔をしていた。そんな時だった、扉が勢い良くバンツと開けられたのは。

「よくもまあ、この家の敷居をまたぐことが出来ましたね、サミュエル・ルード！」

現れたのは、タニム・ウェラーだった。

「お義母さま、来客中です！ 失礼な態度は取らないでいただけますか？」

決して褒められた態度ではない義母へセイジが意見するが、そん

な彼女をフンと鼻で笑うとツカツカとサミュエルのところまでやってくる。

正直、とつと帰れば良かった。

心底そう思ったサミュエルだった。

「一体、どういったご用件でいらしたのかしら、まさか今になってトールの家庭教師になりたいと？」

「ハハハ、まさか。残念ですが、トール君には興味は一切ありませんので、ご安心を」

初めて事務所に来たときとまるで変わらないタニム夫人の態度に、サミュエルはうんざりして返事をする。

彼女の神経を逆なでするような言葉で。

サミュエルの言葉に、ウェラー姉妹は真っ青になり、タニム夫人は怒りで真っ赤になった。

「それではどういうご用件でいらしたのかしら？」

それでも平常心を取り繕うとするタニム夫人をさすがだと思った。

「いえ、これからメリルさんを私の弟子として迎え入れたいという話をしまいして。それを快く、受け入れてもらったところです」

だが、サミュエルのこの言葉にタニム夫人はついにキレた。

「あ、貴方は……トールには興味がないと言っておきながら、その見習い魔法使いという出来損ないには興味があるというのはのですか！」

「彼女が出来損ない？ その両目……ちゃんと機能していますか？確かに彼女は魔法使いのランクでは見習いという立場にあります

が、そうですね。一ヶ月もすれば、トール君と並びますよ。」

その言葉に、信じられないと言葉が見つからないタニム夫人。驚きを隠せない、ウェラー姉妹だった。

「結局、その後トール君はどうですか？ どのような家庭教師をつけましたか？ 現在、弟子を取っていないウィザードは自分を入れて数人と聞いています。その多くは国外に出ている……ということ、高位魔法使いあたりを家庭教師にという感じですか。伸びましたか？」

別にサミュエルは喧嘩を売っているわけではない。

とはいえ、無意識にタニムのような傲慢な人間を嫌う傾向があるので、それが言葉となっているのだろう。

「ええ、ええ、伸びましたとも。いずれはウェラー家当主として、英雄の息子として相応しい魔法使いになりますわ！」

「へえ、それは良かったですね。それじゃあ、メリル、当初の予定通り訓練しようか？」

「え、あ、はい！」

ほとんどスルーする状態でタニムの話を聞き流したサミュエルは、メリルと当初の予定通り訓練をすることに。

正直、いい加減、この人と話すつもりはない。

「あの、よろしければ私たちも見学させていただいてよろしいですか？」

セイジがそう言い、アンも頷く。

「構いませんよ、では訓練所まで案内よろしくお願いします」

怒りで震えるタニムを他所に、サミュエルは微笑んだ。

メリルは義母が嫌いだが、さすがに先ほどのやり取りには不憫だ  
と思わずにはいらなかった。

同時にサミュエルがここまで嫌味を言うような人間だとは思って  
もいなかった。

「あの、ずいぶんと義母がお嫌いなようですが……」

遠慮するように姉のセイジが声を掛ける。

「あれ？　なんか変でしたか？」

それはもう、すごく変というや嫌味な人間になっていました。と、  
三人は頷いた。

「確かに、トール君の件でやってきた時に好き放題言っで、最後には  
キレて、裏でカドリー孤児院の土地を買収しようとしたことには  
腹を立てましたが……」

そんなことをしていたのか！

自分たちの知らなかった義母の暴挙に呆れるメリルたち。

とはいえ、相手が悪いだろう。ウィザードといえば、魔法使いの  
頂点である存在。そんなウィザードが国にいてくれるだけで、周囲

の国は戦力としてみる。例え、ウィザードが軍に関係なくてもだ。そんなウィザードを国へ置いておきたいと思うのは当たり前だ。だからこそ、ウィザードであるサミュエルが援助を行っている孤児院の土地を買収などできるわけがない。だが、それを義母はわからないのだ。

貴族の娘として欲しいものを欲しいままに手に入れて育った義母に、説明してもわからないと思うが……

「そんなことをしていたのですか……本当に申し訳ありません」

義母の行動を謝罪するセイジと一緒に頭を下げるメリルはふと思いついた。自分たちと義母が血が繋がっていないこと、義母が私たちを嫌っていること、そして私たちも義母たちを嫌っていること、話したほうがいいだろうか？

とはいえ、家庭の問題に巻き込むのも悪い。

そんなことを考えていると、訓練所の前で一人の少女が立っていた。金髪を伸ばして、左右で結んでいて、若者が好みそうな短いスカートの上にラフなシャツを着込んだ、メリルの二つ上の姉……ルーシー・ウェラーだった。

「お姉ちゃん」

「ん、ああ、メリルか」

「メリルか、ではないでしょう、ルーシー！今日はお客様が来るからと言ってあったでしょう！ご挨拶なさい！」

セイジに言われ、面倒そうな表情を隠そうともしないルーシーにサミュエルは近づくと挨拶をする。

「始めまして、サミュエル・ルードと申します」

「ルーシー・ウェラー」

名前だけを面倒くさそうに言うルーシーにセイジが怒鳴るが、彼女は気にした様子もない。

それどころか、

「ていうか、アンタ……その作り笑い、キモイ」

「……キモッ？」

いや、そりゃ、自分のことを二枚目だとは思っていないけど、まさかキモイなんて言われるだなんて。

まさか……実は俺ってキモイの？

サミュエルは面と向かって言われただけに、自分がキモイ人間なのだろうかと真剣に考え始めてしまった。

「ルーシーも一緒にメリルの訓練を見学しなさい」

「はぁ、私には関係ないじゃん。そもそも、私は魔法使い見習いですらないし」

「それでもです。学校にもいかずに、毎日無駄に過ごしているのですから、メリルのように向上心というものを身に着けなさい！」

「向上心があっても、見習いじゃあねえ」

そう言って馬鹿にするように笑うルーシーにさすがのメリルもムツとした。

そして、ウィザードであるサミュエルの弟子になったことを話す。ちなみに、落ち込んでいたいたサミュエルを慰めたのは、以外にも無表情のアンだった。

「大丈夫、貴方は別にキモくない」

「……本当？」

「うん」

慰められて立ち直ったサミュエルとウェラー四姉妹が訓練所に入ると、先客がいた。

トール・ウェラーと四人の魔法使いだ。多分、四人が専属の家庭教師なのだろう。

「いやいや、流石はウェラー家の訓練所。広いのはもちろん、対魔法衝撃もしっかり出来ているね」

感心してキョロキョロするサミュエル。

「サミュエルさん、じゃなかった……師匠、今日はどうしましょう？」

「今までどおりにサミュエルさんで良いよ。師匠なんて呼ばれると、こそばゆいよ」

緊張した様子のメリルに苦笑してみせる。

三人の姉にこれから訓練を見られるのだ、大方気分は授業参観だろうとサミュエルは思った。

「ねえ、アンタ本当にウィザードなの？」

「ええ、まだまだ未熟者ですが」

「ふーん、そうは見えないけど」

「よく言われますよ」

事実なので笑って返すと、嫌味が通じなかったことに腹を立てた

のかフンツと離れていってしまうルーシー。

「すみません、妹が……」

「いいえ、ウィザードに見えないというのは良く言われるんですよ。文字通り、一七歳の若輩者ですから」

申し訳なさそうにするセイジに気にしなくて良いと返すと、セイジとアンモルーシー同様に離れた場所で訓練を見ることとなる。

「じゃあ、やろうか。とりあえず、営業スマイルはやめるぞ」

「……どおりでニコニコしてるなーと思ったんですけど、営業スマイルだったんですね」

ニヤリ、と笑うサミュエルに呆れて返事をするメルルだった。

「とりあえず、この一週間で教えたことのおさらいから」

この一週間では魔力の制御について訓練させていた。基礎の、延長上の訓練だが、瞑想や単純な体作りなどの訓練と比べ、実際に魔法を使うのでメルルも喜んでいたのは記憶に新しい。

まずは手のひらサイズの火球を一つ作らせる。その数を増やし、火球一つ一つに込める密度を統一させたり、最小限にしたり、威力を求めて込められるだけ込めると色々だ。

これは魔力制御の訓練だが、これは意外と大事である。

例えば、一〇〇ある魔力の内で50の魔力を使って倒せる敵に、一〇〇の魔力を全て使ってしまうのはただの馬鹿だ。余力を残し、不意の事態に備えておくのも大切だ。

それが無意識にできるようにするための訓練の一つである。

魔法、一つ一つによって、必要な魔力は決まっているが、個人によって魔力が強ければ少なくてすむし、弱ければ多く必要とする。

それを魔法使いは無意識でやっているのだが、それを調節し、必要最低限の魔力で行えば効率が良いことこのうえない。

これらは無意識にできるようになるのが、高位魔法使いレベルだ。もつとも、全ての高位魔法使いができるわけではないし、魔力量が多いものは気にもしないことではある。

だが、この訓練は、他の訓練にも応用が利くのでサミュエルはメルにやらしているのだ。サミュエル自身、最初はこれを行った。

「よし、一回休憩」

一〇〇の火球を操っていたメルは、ふう、と一息つける。

そんな妹を見て、セイジは驚いていた。まさか魔法使い見習いと呼ばれている妹が一週間でここまでのことをできるとは思ってもいなかったのだ。

一〇〇の火球を操るというのは、一〇〇の火球を意識しなければいけないことである。

ただ、一〇〇の火球を造り放つだけとはまったく違うのだ。

「たった一週間で……すごいわね」

「うん」

アンも同意する。

「制御はいい感じだな。これを毎日繰り返し、数も増やしていけば、いずれ無駄なく魔法を使うことができるようになるから」

「はい！」

「じゃあ、次のステップに今日は進もう。この一週間見ていて、やはり君の得意属性は改めて炎とわかった。そこで、一つ魔法を教えてあげるよ」

魔法を教えてもらえるということに、メリルの表情がパアと輝く。

「炎爆系中級魔法・爆輪。一つの火球に魔力を込め、その込め多分だけを爆発させる至近距離の魔法だ。込める魔力によっては攻撃力も上がる。ただ、至近距離でというのが欠点で、遠くからでは効果が落ちてしまうというのがある」

じゃあやってみせるからと、右手を上げると高密度に魔力が凝縮させられた火球が一つ。

「この火球を相手に打撃と共に放つことで、円状の爆発で相手を吹き飛ばす。この魔法の利点は、敵に周囲を囲まれたときに、地面に思い切り放てば敵をなぎ倒すことができることかな」

それじゃあ、さっそく、と言い掛けたサミュエルだったが、一人の少年が声を掛けたことで動きを止めた。

「あの、サミュエルさん、お久しぶりです！」

少年——トール・ウェラー。

母親と同じ亜麻色の髪を耳の辺りで揃えている清潔感ある髪型に、一二歳という年齢のわりに鍛えられた体は、さすが幼少時から訓練されているなと思わせる。

訓練をしても筋肉が付かず、力にあまり自身がないサミュエルにとっては羨ましいと思えた。

だが、

「トール君、今訓練をしている最中なんだ。君が、いくら休憩中でも遠慮してくれるかな？」

「あ……そうでした、すみません！」

頭を下げようとしたトールだったが、突然現れたタニムによって止められた。

「その必要はありません」

「母上？」

謝罪しようとしたところを止められ、首をかしげるトール。自分が間違っていたのに、なぜという表情だ。

初めて会った時に挨拶以外黙っていた彼だが、母親と違い常識があるのかなとサミュエルは思った。

「その男はトールの家庭教師を断っておきながら、見習いという出来損ないのメルルを弟子にした愚か者です。英雄の息子であるトールが頭を下げる必要はありません！」

サミュエルは呆れた。いや、そこは謝っておこうよ、人として。訓練の邪魔しちゃったんだからさ。

「出たよ、あのオバハン、頭沸いてるんじゃないの？」

ルーシーのボソリといった言葉に、頷いてしまったサミュエルだった。

「貴方はそのメルルが一ヶ月でトールに並ぶと言いましたね」  
「言いましたよ」

「では、よほど貴方は優れた魔法使いであり、指導者なのでしょうね？」

タニムの企みが解ってしまったサミュエルだった。

「あのオバハン、絶対にあの男にトールの家庭教師ぶつける気満々だろ……」

「ですよー。そんな雰囲気だし、いかにも企んでいます！ 見たいな感じで……」

「お義母さま！ その言い方は、ウィザードであるルード様に失礼です！」

セイジはそう言うが、タニムは彼女の言葉を無視して続けていく。

「どうでしょう？ 優秀なウィザードである貴方なら、トールの家庭教師である魔法使いと戦って実力を見せてはいただけませんか？」

「やっぱり、そう来るか……」

「だけど……その喧嘩買った！」

「構いませんよ、では四人同時にいきますか？」

意識して挑発してやったサミュエルの言葉に、改めてタニムの顔が怒りに染まったのだった。

## EPISODE 4 「ウェラー家での訓練」(後書き)

ウェラー家全員集合です。次回は初バトルとなります！

ご感想、ご意見、ご評価をいただけるととても嬉しいです。よろしくお願いします。

## EPISODE 5 「サミュエルの実力」

タニム・ウェラーにとって、サミュエル・ルードは気に入らない存在であった。

最愛の息子、愛した人の忘れ形見、英雄となるべきトールの家庭教師を断ったどころか、才能のないメリルを弟子にとるということにもはや我慢が出来なかった。

タニムとって、前妻の娘たちなどどうでも良かった。夫が生前の時は、表面上は母親役を演じていたが、今はもう取り繕う必要はない。

当主に納まっているセイジは高位魔法使いであるが、いずれはトールも高位魔法使いとなる。それは時間の問題だろう。

その時には当主をトールにとまで考えている。

そこまで溺愛しているトールを興味が無いとまで言った男を、タニムが許せるはずはもちろん無かった。

そこでタニムは、サミュエルにトールの家庭教師たちをぶつけることを考えた。

勝算はあった。サミュエル・ルードは魔法剣士だ。正確に言えば、魔法刀士というところだろうか？

サミュエルはどんな時でも刀を手放さないと聞く、噂では刀が無ければ実力も下がるとのことだ。そして、現在、ウェラー家に来ることから遠慮したのか、刀を持っていなかった。

難色を示した家庭教師たちにそのことを伝え、さらに倒せれば褒美を出すと言うと素直に従ってくれた。

なのに、なぜ……

「どつして……」

目の前で繰り広げられる光景が信じられなかった。

刀を持たないはずのサミュエルが、四人の高位魔法使い相手にまともな魔法も使わずに、しかもメリルに講義をしながら戦っている。いや、戦っているという言葉は間違っている。一方的だった。

「化け物……」

初めて、ワイザードという存在に恐怖を覚えた。

だが、同時に、そんな化け物的な強さを持つからこそ、トールのために役立てなければと、タニムは恐怖を隠すように野心を抱いたのだった。

ルーシー・ウェラーにとって、魔法とは無縁のものだった。

ウェラー家に生まれたが、魔法の才能は持たなかったルーシー。

悩んだこともあったが、自由に生きるようにと父に言われたことを覚えていたルーシーは、一般学校に通い、一〇代、二〇代向けの洋服メーカーのモデルなどをしていた。

楽しかった。だが、そんな楽しさもすぐに壊れてしまった。

結局、どこにいても英雄の娘という言葉が付きまとう。

努力してモデルとなったというのに、英雄の娘だからと影で誹謗中傷されたことも少なくない。

それが嫌で、モデルをやめて、学校にも行かずに家で退屈に過ごす日々を送っていた。

魔法を学ぶという選択もあったが、そんなことをしたらそれこそ英雄の娘という言葉がついてくる。

父が嫌いなわけではない、だが、自分を見てくれない周囲は大嫌

いだった。

自然と口も悪くなり、ついサミュエルに突つかかってしまったが、客人にする態度ではないとわかっている。だが、こうしてどこかで反発しなければやっていられなかった。

そんなルーシーでさえ、啞然としてその光景を見つめていた。

「嘘……」

高位魔法使いといえば、ルーシーでさえその実力の凄さは知っている。なんせ、姉のセイジが高位魔法使いだ。その実力を見た時は、素直に驚いたものだ。

だが、サミュエルはレベルが違う。

魔法を使うトールの家庭教師の攻撃を、体を少し動かす程度で避けると、メルルに講義を始めた。

ちょうど良いから実戦においての、などと言っているが、聞かされているメルルも呆然としていた。

その扱いに怒った高位魔法使いたちは、連携を取って襲い掛かるが、すべて避けられ、顔や腹に、拳と蹴りが放たれて吹き飛ばされたのだ。

「これが、ウィザード……」

初めて見るその実力に、ルーシーはただただ呆然としていた。

「ちょうど良いから、講義をしよう」

メルルは四人の高位魔法使いを相手にしながらそんなことを言う  
サミュエルの正気を疑った。

「まずは、このおっさんが使ってる剣に魔法を纏わせる技術、これを大雑把に『魔法剣術』といって、流派など色々あるけど……これはダメだ」

剣を避けたサミュエルの手には、相手が振るった剣がいつの間にか握られていた。

「本来、魔法剣術というのは剣に魔法を、例えば炎だったら纏わせるのではなくて、刀身そのものを炎とするのが理想系だ。あえて、纏わせるだけという流派もあるけど、基本はこっち」

そう簡単に言っただけのけるサミュエルは、奪った剣の刀身を炎としてみせた。

これには、剣を奪われた高位魔法使いだけではなく、他の三人も、いや、ツールも姉たちもギョツとした。

「俺じゃあ、やっぱりこの程度か……あまり炎は得意じゃないし」

そんなことを言ってみせるサミュエルだが、得意でないとはいながらここまでできるのは本来異常だ。

「まあ、これが理想系の一つだ。で、ここからが魔法剣術の面白いところ。普通、剣には長さが決まっているけど、刀身が炎となった今、魔力を込めることで長さを調節できたり、魔力を凝縮することで本来の剣の何倍もの強度を持つことができる。さらに、こうして剣を振るうことで」

ゴウツ、と音を立てて刀身から炎が放たれた。

「こういうこともできる。ホラ、剣を返すよ」

啞然としている相手に剣を投げ返すと、メリルに続ける。

「剣だけじゃない、腕にも、足にも同じことはできる。とはいえ、長さなどの調節はどうしてもやり辛くなっちまうけど、極めればできるようになると思うね。また、炎や風の魔法ではなく、純粋に魔力を身体に込めることによって、身体強化も可能だ。ここまでは良いかい？」

「はい！」

「よし、じゃあ実践して見せるから見てな」

そして、初めてサミュエルは四人の高位魔法使いの方を向いた。同時に、四人が顔色を青くするが、無理は無い。自分たちとは実力が違いすぎると理解しているからだ。

「魔法剣士が一人に、魔法闘士が一人、んで……定番の魔法をぶっ放すことを得意とする遠、中距離系の魔法使いが二人か」

ふむふむ、と四人の格好や身につけているもので予想してみせる。このくらいは魔法使いとして基本だ。戦う相手の予想が出来ないなら、簡単に命を落としてしまう。

「高位魔法使いらしいけど……」

そこまで言っただけだった。

多分、セイジ・ウェラーの方が実力者だと思う。

そもそも高位魔法使いは……いや、魔法協会に所属する者は基本

的にプライドが高い。自分を価値を知りたくて、自分の存在理由を見つけたくて、多くの理由で所属するが、結局は自分のためだ。

また面倒なことに、魔法使いとしての質に比例してプライドが高くなるので始末に置けない。

そんな話はさておき、プライドが高いのが基本である高位魔法使いが、いくら英雄の息子の為だとは言え……あの母親に上から者を言われて素直に頷くとは思えない。

テイラード・ウェラーの友人関係はそれぞれ有名であるし、彼らは現在の妻であるタニムに好意的ではないという噂もある……すると、ここにいる魔法使いは高位魔法使いであつても、まあそこそこの中位魔法使いに毛の生えたレベルであろつ。

「高過ぎるプライドはいらないけど、こんなババアに良い様に使われてんじゃねーよ」

ボソリと呟いたサミュエルは、タンと軽く床を蹴った。

「いいかいメリル。まずは魔法剣士だけど、いくら剣士だからといって接近戦だけが得意ってわけじゃない。中には、中距離攻撃魔法を使う奴もゴロゴロいるし、魔法剣士と世間で思われててもオールラウンダーな魔法使いもいる」

魔力の込めた手刀を魔法剣士に振り下ろす。正確に言えば、剣を持つ、その腕に。

魔力を込めたことで強化されたその手刀は、勢い良く振り下ろされて、魔法剣士の腕を折り、ついでに剣の柄も叩き折った。

「魔法剣士の攻略法はとにかく攻める。魔法剣術を使う暇を与えない、剣術にも流派があることはさっき言ったけど、流派には型があるからそれも使わせない。これが基本」

これは本来、魔法学校でも上級生クラスになれば教わることのできる至極基本的なことの一つ。

「基本中の基本だけど、これが一番効率が良い。相手の出方を待っていたら、あつという間に切られちまう」

痛みに悲鳴を上げる魔法剣士にさらに手刀を振り下ろし気絶させると、次は魔法闘士に向かう。

「く、速過ぎる！」

「いや、アンタが遅いだけ」

魔法闘士が己の腕を守る為に装備する籠手を蹴り割ると、開いた懷にもぐりこんで拳を握る。

「炎爆系中級魔法——爆輪」

拳に圧縮させられた炎が爆発する。

気絶する程度にしか込められていない魔力だったが、魔法闘士の服を燃やし、訓練所の壁に叩きつけるには十分過ぎる威力だった。

「魔法闘士も攻略は魔法剣士と変わらない。獲物を持っていない分、接近し過ぎると捕まえられたりするからそれらは気をつけなければいけないけどな」

メルルは口を開けて啞然とする。セイジも同様だった。

タニムがトールのために雇った家庭教師が弱いわけが無い。少なくとも、トールより実力も、実績もある魔法使いだろう。

それを、まるで赤子の手をひねる様にあつという間に二人も倒し

てしまったサミュエル。

魔法などは使っていない。せいぜい、魔力で体を強化している程度だ。

「凄い……高位魔法使いがあんな簡単に二人も……」

驚きを隠せないメルルを他所に、サミュエルは魔法使い二人に向かう。

二人は、杖を、腕をサミュエルに向けて魔法を放とうとするが――

「見え見えなんだよ！ お前ら、高位魔法使いならもう少し応用や予想ができないことをやってみやがれ！ 直線に魔法ぶっ放す気満々じゃねーかよ！」

さらに床を蹴って、先ほどよりも早く動く。

一瞬で後ろに回ると、手刀を叩き込んで二人を気絶させた。

「なんていうか、典型過ぎるから授業にもならないわ……この二人」

まあいいか、と呟いて、サミュエルはメルルへ近づく。

「どうだった、参考になったか？」

「えっと、その……言いくいんですけど、全然なかったです！ 最後とか見えませんでしたから！」

そんなメルルの叫びに、サミュエルは笑う。

「別にあれくらいの動きならそのうち出来るようになるよ。とりあえずは、魔法剣士、魔法闘士の基本的な戦い方と、爆輪を実際に使って見せたけど、どう？」

「絶対無理ですよ……」

「大丈夫だって、それで、ご感想は？」

「はい、至近距離で相手に手を出させないというのはわかりました。後、爆輪はやっぱ至近距離だとリスクがありそうですね」

「それだけわかれば合格だよ。後は、応用に応用を重ねることが大事」

ポンとメリルの頭に手を置いて撫でると、さてと、とサミュエルはタニムの方を向いて笑顔を作った。

先ほどルーシーにキモイと言われた、営業用スマイルだ。

「どうでしたか？ さすがはタニム・ウェラー様が雇った高位魔法使いでした、ついついウィザードとして負けられないと本気を出してしまいました……いや、お恥ずかしい限りです」

性格悪ッ！

ウェラー姉妹は心底そう思ったが、タニムは怒りで顔を真っ赤にして訓練所から出て行ってしまった。

「どうだメリル、俺の勝ちだ！」

「……どこの子供ですか、サミュエルさん」

子供みたいに笑うサミュエルを見て、呆れたように、何かを諦めたようにメリルは盛大に溜息を吐いた。

——本当に、大変な人の弟子になっちゃったかも

そう思わずにはいらなかった。

## EPISODE 5 「サミュエルの実力」(後書き)

性格の悪い一面を垣間見せた主人公でした。

ご感想、ご意見、ご評価をいただけるととても嬉しいです。よろしくお願いします。

## EPISODE 6 「来客」

「お前って、まったく大人気ない奴だな」

はあ、とため息交じりで呆れられた。

事務所にやってきた友人であるストラトスに先日話をしてみた  
らこうだ。

昨日の出来事だというのに、意外と話は広がっているらしい。な  
んでも、英雄の後妻に納まった傲慢な息子バカが最年少ウィザード  
にブライドごとコテンパンにされたと。

「知ってると思うけど、俺はあの手の人って嫌いだからさ」

「サムの子になったメルルさんたちに迷惑が掛かるだろう。もう  
少し考えて行動しろって」

「それがさ、笑えることに。あの四姉妹は後妻のことが大嫌いみた  
いでさ、今後は気をつけてくださいと言いつつも顔は笑ってたから」

そう言って笑うサミュエルに再度ため息を吐くストラトス。

とはいえ、英雄の娘たちが後妻を嫌っているのは有名な話だ。噂  
好きの貴族だけではなく、市民までもが知っていることでもあった。

「しかし、気を付けろよ？」

「何を？」

「あのタニム・ウェラーだよ。あのオバサンはむしろ今回の一件の  
せいでなおさらお前をトール・ウェラーの専属にしたがっているっ  
て話だ」

「はあ？　なんで？」

あれだけやってやったのに、とついつい舌打ちをしてしまう。

「あれだけやったからだよ。あれだけやったお前が、トール・ウェラーの専属になれば、結果的にサムがタニム・ウェラーの言うことを聞いたことになるだろ？」

「絶対にありえないけどな」

「一番厄介なのが、トール・ウェラーがお前に弟子入りしたくてしようがないってことだ。今回の件でさらに拍車をかけたな」

「あのトール君がね……」

含みのある言い方をしたサミュエルに首をかしげるストラトス。

「なんていうかさ、弟子入りしたければ自分で言えばいいだろ。母親が全部喋ったんだぜ？ てつきり、母親が勝手に決めて命令しに来たのかと思ってたよ」

「タニム・ウェラーはそこまで馬鹿じゃないさ。もっとも、現時点で十分馬鹿には馬鹿だけだな。王家の方にもトール・ウェラーの専属にサムを付けるように行ってきたらしい」

「それで、女王様は？」

「バツサリと断ったよ。まあ、サムは一応イスタリオ市民だけど、ウィザードでもあるからな。王家だろうが強制はできない。もっとも、サムがイスタリオ王国に忠誠を誓ったり、魔法騎士団などに所属すれば話は別になるけど」

「ごめんだね、とサミュエルは笑う。

「そもそも、あの女王様はそんな無理難題を押し付けないだろう。例え、テイラード・ウェラーの息子だからって」

「もっともだ。確かに、テイラード・ウェラーは国がもっとも腐っていた時期に、国のため国民のためにと戦ってくれた英雄だ。だか

「からこそ、王家はウェラー家に誠意を持っている……だが、だからといって我俣が通るわけがない。それじゃなくても、タニム・ウェラーは何度もその我俣をしてきたんだ」

「一回や二回ならさておき、もう無理だと言っことらしい。実際はもつとだろう。」

「つまり、それだけ我俣なことを言っているのだ。タニム・ウェラーは。」

「よつぽど、英雄さんと結婚できたのが嬉しかったんだらうね」

「そうらしいな。もともと箱入りな我俣娘だったらしいが、結婚後はさらに拍車が掛かったらしい。テイラード・ウェラーが生きていた時は、彼自身が止めていたが……」

「今は止められる者はいないと……」

「やんなっちゃうねー、と二人で苦笑いをしてしまう。」

「ところで、急にやってきたお前の用事は？」

ふと、今更ながらに話題を変えるサミュエル。  
すると、ストラトスはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべると、ドンと音を立てて厚みのある何かをテーブルの上に置く。

「なんだよ、これ？」

「姉上からお前へのプレゼント……つまりお見合い写真だ。ザマー  
三口」

「またかよ……俺、散々断ってきたんですけど？」

「だからこそ、姉上に直接頼んで俺に持ってこさせたんだよ。お見合い写真は三十枚、つまり三十人がお前と結婚したいとき、おめでとっ」

良い笑顔でそう言ってくれる友人に、サミュエルは心の中で罵倒することにした。

「まじめな話、最初はもつと多かつたんだ。それを、俺と姉上が厳選して、純粹にお前を慕っている娘や良縁なのを見繕って選んで三十だからな。最初は百以上あったんだぞ？」

「あのな、厳選してくれるのは嬉しいよ。正直、百枚も女の写真なんて見たくないからな。でもな、女王と王子がわざわざそんなことしてるんじゃないやねえよ！　どれだけ暇なんだよ！」

そう、この目の前にいる友人は、ストラトス・イスタリオ。イスタリオ王国第一王子だ。

そして、その姉はファニール・イスタリオ。現、イスタリオ王国女王である。

「部下が有能だから暇なんだよ、完全には言えないが、腐った貴族はほとんどいない。だからこそ、公務は順調に進んでいるから安心しろ！」

「滅びろ、イスタリオ王国……」

「ちなみに、姉上からの伝言だ。お見合いが嫌なら、さっさと私を娶れとのことだ」

「それこそめんだー!!」

絶叫するサミュエルを見て、大笑いするストラトス。

とはいえ、王族がウィザードと結婚するということは珍しくはない。多くもないが、何件か例もあるのは事実だった。

王族は血を重んじるが、同時に強き力も求める。だからこそ、ウィザードが王族と結婚することはないのだ。とはいえ、ウィザードには変わり者が多い、貴族の出であっても、紙一重の者もいる。

そんな人物を王族の婚姻相手にとというのは無理があるのだ。

それに比べると、サミュエルはウィザードであり、まだ発展途上でもある。そして、まともとはいえないが、ウィザードの中では常識がある方だ。一番の理由として、年齢もあるだろう。イスタリオに暮らす多くのウィザードは三〇代から上だ。その中で唯一、サミュエルだけが一〇代なのだ。

そんなサミュエルを放っておく貴族はもちろん、王族関係者もいなかった。

婚姻を結んでしまえば、ウィザードが一人身内になるというメリットもある。まさに、優良物件なのだ。

「別に、姉上と結婚しても良いと思うけどな。どうせ、二〇歳になったら、俺が王になる。そうなれば姉上は自由とまではいかないが、今のように望まない生活を強いられることは無い。年は結構離れてるけど、まあギリギリ二〇代だし、見合い相手の一人として勘定に入れてやつといてくれ」

「……知るか」

ストラトスはまともに返事をしないサミュエルに苦笑すると、一枚の写真を束から取り出し、開いてサミュエルの投げる。

受け取ったサミュエルはつい、へえと声を出してしまった。

そこに写っていたのは、まさに美女という言葉が相応しい女性だった。

「マリア・バレンタイン。年齢は一八歳で、お前より一つ年上だ」

「バレンタイン……どこかで、聞いたことがあるな。ああ、魔剣士の一族か」

「正解！ イスタリオ王国で最強と言われるバレンタイン一族。魔剣士を輩出する一族で、王族の護衛や剣術を教えたりする立場の一族だ」

ストラトスの説明を受けながら、マリア・バレンタインの写真をまじまじと見つめるサミュエル。

プラチナブロンドの髪を腰の辺りまで伸ばし、一見、細身でか弱そうに見えるが、訓練をしているであろうことが写真越しにサミュエルには解った。

しかし……

「無愛想な女だな……普通、こういう写真って笑顔とかじゃないか？」

「彼女はいつもそうらしい。無愛想というよりも、無表情という感じがだろう。もっとも、サムに無愛想とは言われたくないだろうけどね」

「うるせーよ」

「彼女はちよつと事情があつてね、剣の腕だけなら歴代のバレンタイン一族の中でも抜きん出ているらしいけど、魔力を一切持たないと聞いたよ」

「おいおい、それじゃあ魔剣士にはなれないだろう？」

「なれないね。とはいえ、そのあたりの高位魔剣士が束になつても勝つことができないほどに、彼女は強い。ちなみに、サムとの婚姻を望んでいるのは本人ではなくて兄上らしい」

どうでも良い情報を付け足してくれるが、本当にどうでも良いことだった。

しかし、興味があるなとサミュエルは思う。

「興味があるみたいだね。結婚とかよりも、彼女の實力にという感じだけ？」

「わかる？」

「わかるさ、長い付き合いなんだから」

いずれにしろ、今回は女王から回ってきた話なので、最低でも一人は会わないといけならしい。

まったく、困ったことになったとサミュエルは思いながら、久しぶりの友人との時間をゆつくりと過ごした。

昼過ぎに、一人の少女が尋ねてきた。

メリルかと思ったサミュエルだったが、彼女ではなく、まさかの人物だった。

「確か、ルーシー・ウェラーだったね」

左右に髪を結んだ少女に少々驚いてしまう。

「そうよ、メリルは学校で引き止めを食らってるから、今日の訓練にはこれそうもないってことを私がわざわざ伝えにきてあげたの。感謝しなさいよ」

「そりやどうも……せつかくだから、お茶でも飲んでくか？ 友達が、良いお茶思ってきてくれたんだ。菓子と一緒に」

「……じゃ、ご馳走になる」

ルーシーを事務所の中に招き入れると、ストラトスの持ってきてくれたお茶と菓子を出す。ちなみに、菓子はクッキーだ。

手際良く用意をしたサミュエルに驚いた顔をしているルーシー。そんな彼女に築いたサミュエルは尋ねる。

「どうぞ……どうしてそんなに驚いてるのかな？」

「なんていうか、ウィザードがそんなに家事に慣れてるってどうなの？ 使用人とかいないの？」

なるほど、と彼女が驚いている理由がわかった。

ウィザードはもちろん、高位魔法使いなどの位の高い魔法使いは弟子が多く持ち、裕福が当たり前なので、弟子が給仕を行うか、使用人を雇うかのどちらかが基本だ。

そんな中、サミュエルは自分で客をもてなしているのである。これはルーシーでなくても、魔法使いのことをある程度知る者なら驚くだろう。

「ウチの事務所は貧乏……とまではいなくても、人を雇える余裕はないんだよね。師匠で所長でもあるシェイナは金遣いが荒いし、俺もそこまで蓄えようとはしないから」

「ふーん、でも孤児院に寄付する余裕はあるんでしょ？」

「……そういうことはスルーして欲しいんだけどな」

「教えなさいよ」

「うわー、上から目線だね。まあ、いいや。簡単に言うと、自己満足だよ。カドリー孤児院の経営者のジュリアには恩があるし、親しくさせてもらってる。それに、自分と似た境遇の子供を放っておけないだろ？」

同じ境遇——その言葉を聞いて、ルーシーはハッとする。

「別に気にしなくなっただけいいよ、親がいないなんてことはそう珍しいことじゃないし、親がいないでも幸せな人間はいるし、親がいても幸せになれない子供だっている。世の中なんてそんなもんさ」

笑ってみせるサミュエルに、ルーシーは呟くように聞いた。

「アンタは今、幸せなの？」

その問いに、サミュエルは笑顔で「幸せだよ」答えた。

「じゃあ、謝らないから」

「謝る必要はないさ。変わりに俺からも一つ、聞いていい？」

「うん？」

「ウチの事務所で働かない？」

質問と言うよりも、勧誘だった。それも、前の会話など無かったような一言に、ルーシーの目は点になった。

## EPISODE 6 「来客」(後書き)

新キャラ、ストラトス登場です。そして、ルーシー再びです。  
ご感想、ご意見、ご評価をいただけるととても嬉しいです。よろしく  
お願いします。

## EPISODE 7 「ラースグリーズ」

自分で言っていることがおかしいくらい理解していた。

つい先ほど、人を雇う余裕がないと言ったばかりだ。だが、魔法使いとしての何かが、いやサミュエル自身が彼女——ルーシー・ウエラーとの繋がりを求めている。

「……アンタ、さっき雇うお金ないっていったじゃん」

もつともな意見を言いながらも、ルーシーも困惑した顔をしている。

「いや、そうなんだけど。なんて言うのかな、わからない、とにかく……君に何かを感じる」

「なによ、それ？」

上手く言葉に出来ない。

そう言おうとした時だった。

「それはまさしく、恋。そうだろう、心の友よ！」

パンツ、と扉を蹴破るような勢いで事務所にやってきた男は……とにかく派手だった。

「以前は恋などするものかと言っていた友が、私が少し旅していた間に恋をしていた。心の友として、今この瞬間に立ち会えたことを嬉しく思う。そして祝福しよう！」

派手というよりも、奇妙な衣装といったほうが丁度いいだろう。

深紅の東方に伝わる衣装を着こなし、首に、腕に、指に宝石をつけ、伸びきった長髪をまとめているターバンにはどういっわけか一輪の花がさしてある。

きらびやか、と言えば聞こえが良いかもしれないが、正直目がチカチカとしてしまうだろう。

実際、サミュエルとルーシーはチカチカとしてしまっている。

「ていうか、恋って何だよ！」

「ふっ、照れることはない心の友よ。友がその小娘に心を奪われ、傍に置いておきたいという理由から事務所で働かないかなどと普段なら絶対に口にしないようなことを言ったのだ。まさに恋！」

「そうなのっ？」

「いや、君もそこで真面目にコイツの話を信じないでください！  
とうか、お前は帰れ！ ラーズグリーズ・オルフォン！」

目に優しくない格好をしている青年、ラーズグリーズ・オルフォンは、サミュエルに怒鳴られても特にきにすることはなかった。

それどころか、うつとりとしながら続ける。

「友よ、恥ずかしがることはない。恋とは自然なことだ。男女がいれば成立する、だが必ずではない。心が、容姿が、相性が、時には同性同士が、互いに惹かれあい求め合う、それが愛！」

ついに愛にまで話が進んじやったよ、とうんざりのサミュエル。

一方、ルーシーは少し顔を赤くして、フムフムとラーズグリーズの話を結構真剣に聞いていた。時折、チラリとサミュエルの方を見るのはどういうことだろうか？

「っ、つまり、お金はないのに、従業員として雇ってまで私に傍にいて欲しいと」

「そう、そして最終的にはオフィスラブ！」  
「オフィスラブッ？」

サミュエルを放って、二人で盛り上がり始めてしまった。  
どうしよう、これ？

とはいえ、やはり不思議だった。自分はなぜ、ルーシー・ウェラ  
ーとの繋がりを求めたのだろうか？

いや、違う。

メルル・ウェラーが弟子である以上、家族であるルーシーと繋が  
りが消えるわけではない。

だからこそ、何度も自問自答してしまう。そして、結局答えはで  
なかった。

「と、とりあえず、従業員になるのは考えておいてあげる。また、  
今度返事しに来るから！」

散々、ラーズグリーズと盛り上がっていたルーシーはそう言い残  
すと、自宅へと帰っていった。

残されたのは、サミュエルと、ラーズグリーズの二人。

「さてと、言い残すことはあるか？」

「待つのだ、友よ。先ほども言ったが、恥ずかしがることはない。

それに、あの小娘も満更ではなかったような気が……」

「違うだろ！ そこじゃねえから！ どうして俺が彼女に恋したっ  
て話しになってんだよ？」

「……………違うのか？」

「最初から言ってるから！ お前、本当に聞く耳持たずだな！ そ  
もそも、この半年間どこ行ってたんだよ、家の人間が探しまくって  
たぞ！」

そう、この友人……と呼ぶには抵抗のある友人とは半年振りの再会だった。

放浪癖があるのは知っていたが、今回は最長ではないだろうか？  
おかげで、オルフォン家は家族、使用人全員が大混乱だった。

「最初の一ヶ月はまた始まった程度だったのに、お前が音沙汰も無しで帰ってこないもんで、死んだんじゃないかなんて思われてたぞ」

絶対にコイツが死ぬわけがない、と内心思いながら、とりあえず家族は心配していたことは告げといてやることに。

「ふつ、過保護すぎる両親や、愚兄たちに心配されずとも私は健在だ。本来ならもつと東方にいたかったのだが、面倒なことに関わってしまったのでな。若作りを頑張る女王へ報告するために帰ってきたのだ」

「お前、それ、本人の前で言ったら殺されるからな？」

「殺されはしなかったが、王宮から叩き出された」

「もう、言ったのかよ！　で？」

何を報告しにわざわざ帰ってきたのだろうか？

この本人は風のように旅をするといい張る放浪癖を持ちの友人はわざわざ女王に報告する為に帰ってくるような性格はしていない。  
だが、報告をしなければいけないほど重要なことならば、もっとも最短の時間で女王の耳に届くようにするだろう。

そしてその結果、本人が自ら帰ってきた。

「手紙でも書けないことか？」

「さすがは友だ。しかし、もうすでに予想はできているだろう？  
奴らが活動していた」

「……天使か」

「そう。かつて神々が全てを滅ぼそうとし、多くの犠牲を出しながらも神々が敗北したと伝わる『神人戦争』……それが未だ終わっていないということを知るものは少ない」

ラーズグリーズのこの言葉を聞いたら、多くの者は笑うだろう。

だが、本当に数少ない一握りの者だけが知っている真実。

それは、『神人戦争』は終わっていないのだ。一度は神々を敗北させたものの、それで終わりではない。すべてを滅ぼさんとする神々を何とかしない限り、根本を何とかしない限りは終わりはこないのだ。

「天使……神々に使える戦士たちだが、多くの魔法使いを集めていた。何かを企んでいることは間違いないな」

「ウィリアム・ザアートは真実を知っていたのか、知らずに予想していたのか……」

「彼の本は読んだことがある。彼は正しい、もう魔族は存在せず、多種族も様々な問題を抱えている。人間同士でさえそうだ。もしも神々が本格的にまた動けば、次に勝つのは神々だろう」

「そして俺たちは死ぬと」

頷く、ラーズグリーズ。

ため息を吐くしかできなかった。

「それで、女王は何て言ってた？俺らが動けっただか？」

「いや、あくまでも報告をしたただけだ。天使は三体だったが、すでに東方の者たちによって屠られている」

思わず、口笛を鳴らすサミュエル。

「もともと東方は神々の信仰の強い国だ。かつて世界を滅ぼそうと

した神々を悪に、人間側に味方した神々を善に祭っている。そして、神や天使の出現率も高い。だからこそ、対策もできているとのことだ」

「対策？」

「簡単に言ってしまうと、持っているのだ。神殺しを」

「な、なんだと？」

まさかの言葉に驚愕するサミュエルに、ラーズグリーズは説明を続ける。

「東方を治めるのは和国という大きな国だ。和国の始祖は神と交わったと伝わり、その血筋でなければ扱えない強力な武器がある。それが」

「神殺し、か」

「そうだ。もともと、神殺しというのは味方した神々が人間に与えた武器であったり、魔族や龍の力だ。国によって善と見られたり、悪と見られたりと面倒だが、和国では善であり悪でもある」

「どういうことだ？」

「和国という神殺しは、神器だ。つまり神の武器であり、神であれば持っているということになる。善き神が使えば善になり、悪神が使えば悪に変わるのだよ」

面倒だなと、正直な感想を伝えると、ラーズグリーズは笑った。どうやら同じようなことを思っていたらしい。

「神殺しについては不明な点が多い。伝説級から実際に存在する力の秘められた武器の中にそれがあるとも言われているが、それは確かではない。そもそも、神殺しの武器がなくても、人間は過去に対抗していた」

「あるに越したことはないけどな」

「そういえば、心の友は使える物は何でも使うタイプだったな」

「悪いかよ？」

「いや、悪くない。私個人としては好ましい。人間、プライドや見栄だけでは生きていけない。だが、その生き方……友は戦い方だが、否定する者もいることを忘れるな」

「わかってるよ。ご心配どうも」

それにしても、とサミュエルは考える。

「天使は魔法使いを集めて何がしたいんだろうね。駒が欲しければ、あの狂ったトワイライト聖国へ行けば腐るほど用意できるだろうに」

トワイライト聖国。

かつて敵対した神を未だに信仰する国であり、ほとんど狂信に近い。貧富の差が激しく、黒い噂が耐えない国である。

「まあ、あの国は神と繋がってるって予想されてるからな。今更か」となると、人数を集めて何をするつもりか？それが気になると女王は言っていたな、また悩んでシワが増えて、王子が八つ当たりされるのが目に見えているな」

「ストラトスいわく、姉上の年齢は色々と過敏らしい……とのことだ」

「些細なことだ。そういえば、女王で思い出したが、手紙を預かっている」

「早く言えよ！」

東方の衣装の袖から、手紙を取り出すとサミュエルに渡す。

手紙を読んだサミュエルは、ため息を一つ吐いてから手紙を閉じた。

「どうやら面倒なことを押し付けられたな？」

「正解。遺跡発掘のご命令。こういうのって、ギルドがやるもんじやないかなと思うんだけどな」

「何を探すのだ？ それにもよるだろう？」

「カグツ遺跡の調査だ。前々から調査をしていたみたいだけど、どうも難易度が高いらしい」

「かつて炎の神を祭っていたと言われる遺跡と記憶している。確かに、あそこには炎の魔物、祭壇を守るガーディアンがいるらしいからな。ギルドや騎士団では難しいだろう。それに、氷結系魔法を得意とする友であれば有利に運ぶ面もあるだろう」

性格に言えば、氷結の弱点も炎である。とはいえ、有利に運ぶかと聞かれると、運ぶだろう。

炎の魔物は炎しか使えない。だが、サミュエルは氷結魔法以外にも手段を持つ。何よりも、この国では最高位の氷結魔法の使い手だ。

「ギルドの方にも依頼はしてあるみたいだけど、現状では誰一人として潜った者はいないってさ」

「賢明な判断だ」

「とりあえず、メルルを連れて明日行くか……お前も来るか？」

サミュエルが誘うと、ラーズグリーズは少し驚いた顔をした。

「友が私を誘うのは珍しいな……もっとも勝手に着いて行く気ではあったが」

「いや、お前って炎の耐性が滅茶苦茶に高いじゃん？ だから盾にしようかと思って」

「フツ、友の盾になれるのであれば例えこの着物が燃える結果となっても構わない！」

「へえ、それ着物っていうんだ？」

何を言ってもポジティブ思考のラズグリーズがちよつと羨ましくなりつつも、悔しいので絶対に口にしてやるかと思った。

「さて、それでは私は行くでしょう。朝一番で事務所にやってくるので待っているように。お弁当は、おにぎりを所望する」

「ピクニックじゃねーよ」

「具は任せるぞ、ただし愛情と友情をたっぷりと込めて握ってくれと嬉しい」

「友情はともかく、愛情だけは込めないから。ていうか、おにぎりは決定事項か？　せめて、具を希望しろ！　何が食べたいかと聞かれて何でも良いとか、任せるとか言われると作る方はすごく困るんだよ！」

なんだかんだで、おにぎりを用意する方向で話が進んでしまっている。

ラズグリーズは事務所から出て行こうとして、ドアのノブに手を掛けて振り返る。

「何だ、具の希望か？」

「心の友よ、先ほどの小娘の件だが、良く考えてみると良い。私は恋と言ってみたが、友はどう思っただけに置こうとした？」

「それは……」

「もしかすると、鍵ではないか？　テイラード・ウェラーが残した、一つの鍵」

「彼女がそうだって言うのか？　俺はてっきり……」

メリルの方だと思っていた。

「可能性の一つだ。ただ、少なくともツール・ウェラーは鍵ではな

い」

「それくらいは知ってるよ。母親が違っじゃねえか」

「さらに付け加えると、セイジ・ウェラー、アン・ウェラーも鍵ではない。これは愚兄が調べたので不安だったが、私も確認しているので間違いはない」

「だから、ルーシーの可能性があるのか……」

「そうだ。だからこそ、直感的にルーシーを求めたのかもしれないな。友はメルル・ウェラーと予想を立てていたようだが、本心ではそう思っていないのかもしれない」

難儀なことだ。

そう言い残すと、ラーズグリーズは事務所から出て行ってしまった。

「なるほど、鍵か……」

一人残されたサミュエルは天井を見上げて呟く。

鍵——それが何を意味するのかは、知る人間は少ない。それこそ、『神人戦争』が終わっていないことよりも知る者はすくないことであつた。

「最初にメルルが来た時に、あの子が鍵だと思っただけだな……違う可能性もあるのか。メルルにルーシー、鍵はどっちだよ、ティラードさん？」

返事が返ってくることはもちろんなかった。

## EPISODE 7 「ラズグリーズ」(後書き)

ラズグリーズという新キャラ登場です。もうしばらく新しいキャラが出てきます。

ご感想、アドバイス、ご指摘などがありましたらよろしくお願いします。

## EPISODE 8 「出発の朝」

今日は、カグツ遺跡へ調査をする日だ。

少し早めに起きたサミュエルは、身支度を整え、わざわざラースグリーズの要望どおりにおにぎりをせっせとこしらえる。メルルは女の子なのでサンドウィッチの方が良いだろうと、細かい気づかいも忘れない。

もつとも、細かい気遣いというよりも、こういうところはマメなのだ。

ピクニック気分全開のバスケットにおにぎり、サンドウィッチ、そしておかずに水筒を入れると。ちょうど良い時間だった。

シェイナの朝食を用意して、昨晚の内に伝えてはいるが、書置きをテーブルに置く。

これでもう、何の心配はない。

「じゃあ行きますか」

サミュエルは遺跡の調査など面倒だと思いつつも、自分自身に言い聞かせるよう呟いてドアを開けた。そして……

「誰だ、貴様は」

なんだかもの凄い美女に、いきなりそんなことを言われた。

「いやいや、君が誰だよ？」

どこかで見たことがある、が……はつきりしない。

容姿といい、腰まで伸ばした繊細で美しいプラチナブロンドといい、人形のように作られたのではないかと錯覚してしまいそうな美しさだが、残念なことにその整い過ぎた容姿には表情がなかった。まさに無表情という言葉がここまで当てはまる者は彼女以外に存在しないのではないか、と思わせるほどに無表情だった。そして女性にしては長身だが、細くか弱そうな印象を与えるそんな体も、見るものが良く見ると鍛えられていることがわかる。

「あ、ひょっとして、マリア・バレンティンさんかな？」

先日、ストラトスが持ってきたお見合い写真で唯一まともに写真を見た人物だと思い出した。

すると、無表情の美女はビクリと反応すると、

「き、貴様、なぜわかった！」

と、驚いたような声を出した。無表情で。

もつとも、声自体もあまり驚いた様子ではなかったが、もしかしたらこれで十分に驚いているのかもしれないとサミュエルは思った。同時に、馬鹿にされている可能性も十分にあるとも思う。

「写真で見たんですよ。君のお兄さんが、お見合い写真として送ってきたので」

本人は知らなかったのか？

ふと、そんなことを思ったサミュエルだったが、マリアは無表情ながらにポンと手を叩く。

「ああ、貴様がサミュエル・ルドか。兄上から話は聞いているぞ。どうしても私と結婚したいらしいな」

「へ？」

なんだか話が違う。

「とはいえ、私はこの年齢で結婚するつもりはない。それに、私は弱い奴と結婚する気はないぞ」

「ご心配なく、私もこの歳で結婚する気はありません」

「……と、いいながらも、サミュエル・ルードはこの人なら、と内心は思った」

「何言つてんのツ？」

「お前の心を読んだのだ」

相変わらず表情に変化はないが、どこことなく自信満々である。こころなしか胸を張っている気がする。

そんなことを思った瞬間だった。

サミュエルはとっさに一歩引く。本当に瞬間送れて、ヒュンという音が先ほどまでサミュエルの首があつた場所を通過した。

「貴様、今……胸が小さいと思つただろう？」

マリアの手には長剣が握られていた。

つまり、ヒュンという音は剣を振つた音で……

「何勘違いで抜刀してるんだよ！ しかも、もの凄く早いし、避けられたことが奇跡的だし！」

「確かに私は女としては凹凸の少ない体だが、これはスレンダーとってモデルなどに多いスタイルだ！」

「聞いてないから。別に、そんなことを聞いてないし、説明も要らないから！」

どうしてこんなに朝から疲れなきやいけないんだ？  
心底そんなことを考えながら、誰かこの状況を何とかしてくれと  
切に願った。

一方、サミュエルの弟子であるメルル・ウェラーも誰かにこの状況を何とかして欲しいと切に願っていた。  
なぜなら……

「ふむ、我が心の友の弟子だな。私はラーズグリーズ・オルフォン。もつとも、名乗らなくても私の話は聞いていよう。普段は、邪険な態度をとる友だが、あれはツンデレという類であることは十二分に承知しているからな。さあ、メルル・ウェラー。心の友の家に行くうではないか！」

誰この人？

一方的に喋る奇抜な格好をした変人に付きまとわれ早数分。メルルは困りに困っていた。

まず、心の友って誰？ 多分、弟子とか言っていたのでサミュエルのことかなと首をかしげてみるが、彼からラーズグリーズ・オルフォンという人物の話など一度も聞いたことがなかった。

だが、メルル自身はラーズグリーズの名前を知っていた。

イスタリオ王国の貴族でも、古い一族の一つであるオルフォン家の天才。同時に、天災であり、変人であるとの話を聞いたことがある。

「今日は遺跡調査とのことだが、友はきつと私のためにおにぎりを

用意してくれているであろう。あれで意外とマメというか甲斐甲斐しいからな。女性であればよき妻となると褒めるところだが、残念ながら友は男だ」

うん、変人だ。

というか、服が変だ。変過ぎる。

東方の着物はまだいいだろう。上質な青い着物も彼のような整った容姿の人物が……やたれ目だが……着るのは似合っている。だが、目がチカチカするほどの腕輪、指輪、首飾りを身につけ、どういうわけか髪を束ねるターバンからは巨大な鳥から取ったのかそれとも人工的に作ったのか、巨大な羽が一枚。さらに、緑と青が綺麗に交わっている巨大な羽を七枚背から生やしている。

「なに、この孔雀男は？」

シンプルな服装をしているサミュエルとは正反対過ぎる。本当に友人なのか？

そんなことを思いながらも、一刻も早くこの孔雀男から解放されたいのかサミュエルが待つ事務所へ早足になるメリル。

「おお、そんなに急がなくても友は置いていたりはないぞ！」

あなたから離れたいんです！

そう怒鳴りたいメリルだったが、必死で耐えた。

多分、こういう人にはなにを言っても通じないだろうと、本能で察したからだ。

「しかし、そなたは姉とはあまり似ていないな」

「姉？」

つい、返事をしてしまった。

しまったと思った時にはラーズグリーズはうむと頷くと話し出す。

「そうだ。ルーシー・ウェラーだったな。昨日、私が事務所を訪問した際に居合わせたのだ。しかも……我が心の友がちょうど口説いているタイミングだったのだぞ！ 私は自身のタイミングの良さに歓喜したものだ。まさか、あれだけ女など興味がないといっていた友が自分の傍に置いておきたいからという理由から事務所で働かないかと誘う場面を見ることができるとは！」

「えええっ！ お姉ちゃんとサミュエルさんが？」

でも、そういえば昨日事務所に行けないことを伝えに行ってくれたのは時間をもてあましていたルーシーだった。

しかし、サミュエルがルーシーに対してそんな感情を抱いていたとは。

モデル経験もあり、妹の目から見ても十分に魅力的に写るルーシーだ。

「でも、接点がない気がする……」

確か、以前家に来た時にサミュエルはルーシーにキモイと言われて凹んだ。だが、まさか、それがきっかけで恋に落ちたのだとしたら……

「……まさか、サミュエルさんは、変態さんなの？」

師匠に対してこんなことを思ったメリルだった。

本人がこの場にいたら、ルーシーに関してのことも、変体呼ばわりしたことにも、大絶叫のような文句をきつと言っただろう。

だが、サミュエルはこの場にはいない。子弟そろって、朝から面

倒な人間の相手をさせられているから。

「もう、いい加減にしてください、本当に！　なんで朝からこんなに疲れなくちゃいけないんですか！　いや、本当にもう、これから遺跡調査とか行かなくちゃいけないんで、今日はお引き取りください、お願いします！」

だいぶ下手に出ていた。と言うよりも、もう懇願に近い。

サミュエルはこれから遺跡調査などという面倒なことをしなければいけないというだけで、結構ウンザリしているのだ。それだというのに、訳のわからない無表情女の相手をさせられて、正直泣いてしまいたい気分だった。

「ふむ、遺跡調査か……最近の魔法使いはそんなことまでするのか？」

「え？　ああ、細かい遺跡調査とかじゃなくて、とりあえず最下層まで降りて、一通りの安全確認と、簡単な情報収集、後は地図の間違いがないかとかを確かめるんだよ。魔物もいるから、後にやってくる調査団のためにも掃討しておかないといけないだろうけど」

「ならば私も行く」

「え？」

……しばし、サミュエルの時が止まる。

「私も着いて行ってやろうと言っているのだ。感謝しろ」

どういうわけか、ちょっと偉そうに胸を張ってそう言うマリアにサミュエルは啞然、呆然。

そして、しばらくして口を開いた。

「いえいえ、朝っぱらからもうお腹一杯なんで勘弁してください」

心からの辞退。

とはいえ、素直に言えば良いという訳ではなく、サミュエルの返事を聞いたマリアは素早く剣を抜くと、ピタリとサミュエルの首筋に当てる。

「貴様の答えは聞いていない」

「だから、何でそんなに速いんだよ……」

避けられないわけではない。余裕、とまではいかないものの、十分に対応できるだろう速さの剣筋だが……どうもマリアは手を抜いてここまでの速度という感じがして仕方がない。

というよりも、その可能性が高いのだが、ここまで無表情の相手から何をどう読み取って良いのかわからずにいるのだ。

サミュエル自身も速い。剣筋はもちろん、動きにもそこそこの自身がある。だが、限界はある。その限界を取り払う為に魔法を使い、限界を超えても、またもう一つ限界がやってくるのだ。

その限界は人それぞれ違うのは当たり前だが、どうも魔法無しで比べた場合……マリアの方に分があるような気がしてならない。

これはカンに近いが、マリアの剣筋からどこことなく、余裕が感じられるからもあるだろう。

だからこそ、サミュエルはウンザリする。実力が高いだけならともかく、ここまで相手にしていて疲れる性格の持ち主と今日一日一緒に過ごさねば行けないことを。

……だが、数時間後、サミュエルは心からこの出会いに感謝する

ことになる。

## EPISODE 8 「出発の朝」(後書き)

作風を少し明るくなるようにしてみました。

ご感想、アドバイス、ご指摘などがありましたらよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n08111/>

---

正しい魔法の使い方！

2010年10月8日23時26分発行